

清朝初期的“恤刑”（五年審錄）

赤城美恵子

在中国，自古以来官僚機構兼任審判機構。上級機關經常向下級機關派遣所屬官員監察司法行政情況。本文討論對象“恤刑”也是司法監察系統的一部分。恤刑是明代設置的程序，每五年一次從中央的刑部以及大理寺派遣官員，對收監于地方監獄的囚犯進行審錄。對於死罪並且有矜疑的案件，予以上奏；流罪以下的案件，則自動減刑。

恤刑具有顯示皇帝仁德、疏理滯獄（長期未決而羈于獄中）、昭雪冤案的功能。在清朝，漢族官僚很早就注意到其功能的有用性，因此要求予以實行。但清朝以恤刑是增加地方負擔的程序為由，對其實施表現出消極態度。當然，即使不實施恤刑，也必須消除滯獄和冤案問題。為了解決難題，清朝要求參與審判的官僚們嚴守案件處理期限、及時辦理日常司法事務。

順治十二年，在漢族官僚的再三要求之下，恤刑得以實施。但是各種問題在實踐中逐漸表面化。由於恤刑本身是被運用於官僚制度之中，其效果難以充分發揮。其次，恤刑官的審錄比最初設想花費時間，反而導致了案件處理的延誤。而且，對於要處理恤刑官上報案件的中央而言，驟增的負擔非常大。

此後，關於順治十七年的恤刑，儘管清朝一度派遣了恤刑官，但是中途中止。到了康熙初期，清朝廢除了恤刑本身。恤刑功能中的一部分則“熱審”、“秋審”取代承擔。此外，清朝不斷摸索特別是能夠杜絕滯獄的方法，結果促進了案件處理期限嚴守的貫徹以及法知識的共享。

清朝初期における「恤刑」(五年審録)について

赤城美恵子

はじめに

古来中国では官僚制が発達し、司法業務は統治行為の一部として皇帝・官僚が行っていた。^① 審理は最末端の州県から始まり、刑罰の重さに応じて一定の上級機関が最終的に決定を下した。例えば、清朝では死罪案件は皇帝が、流罪案件は刑部が、徒罪案件は総督・巡撫が、笞杖案件は州県が、それぞれ最終的な決定者となっていた。^② 下級機関は自らの決定しうる範囲を超えた案件については、処理原案を作成して、時には罪犯・証人等とともに上級機関へと送り、その判断を仰がなければならない。しかしながら、下級機関から報告されない限り上級機関では事案を把握することはできない。そのため中国では、古く漢代より、しばしば上級機関から下級機関へと官員を派遣して、その司法行政を監察させた。^③ 司法監察は「録囚徒」・「慮囚」・「審録」と呼ばれる集中審理の手続を通じてなされ、上級機関の官員は行く先々の監獄に収監されている罪囚を直接審理し、未結の事案があれば(長期間に及ぶ者もあり、それを「滯獄」という)すみやかに決着を与え、冤罪が訴えられれば正しい刑罰へと改めた(「平反」)。

清朝初期における「恤刑」(五年審録)について

本稿が対象とする「恤刑」も司法監察システムのなかの一つの手続である。

「恤刑」はそもそも「あわれみをもつて刑罰を下す」という広い意味を持つ。ただ明代後半および清代初期においては特定の手續を指す言葉として用いられていた。『大明会典』は「恤刑」という項目を立て、次のように述べている。

国朝は刑獄を慎恤する。毎年在京の監獄にはすでに熱審があり、さらに五年ごとに大審の例がある。成化間よりはじまり、その時期になれば刑部が題請して、司礼監の官に勅して三法司と会同して審録させた。南京はすなわち内守備に命じて法司とともに挙行させた。矜疑として遺釈した数は常に熱審に倍した。在外に関しては、刑部・大理寺の官員を派遣した。……それぞれ勅を奉じて巡按御史と会同して事を行わせた。

〔国朝慎恤刑獄、毎年在京既有熱審、至五年又有大審之例。自成化間始、至期刑部題請、勅司礼監官会同三法司審録。南京則命内守備会法司举行。其矜疑遺釈之数、恒倍于熱審。其在外、則遣部寺官。……各奉勅会同巡按御史行事。〕

また、清朝初期の康熙『大清会典』は「恤刑」を次のように説明している。

国朝は徳を尊び刑を緩める。毎年の熱審のほか、さらに恤刑の例があり、五年に一度これを挙行している。民命を慎重にする意でないものはない。順治元年よりはじまり、その時期になれば題請して、刑部・大理寺の法司の各官に命じて、会同して審録させる。その直省にある者に関しては刑部・大理寺の官を派遣して、勅を奉じて分往して、巡撫・巡按御史および諸司とともに詳審させる。矜疑として遺釈した数は常に熱審の数に倍した。その間、時に行い、時に停止した。すべて特恩から出るものである。

〔国朝尚徳緩刑、於毎年熱審外、又有恤刑之例、五年一举行之。無非慎重民命之意也。自順治元年始、至期題請、

命部寺法司各官、会同審録。其在直省者遣部寺官奉勅分往、同撫按諸司詳審。矜疑遺積、恒倍於熱審之數。其間時行時止、出自特恩^⑤。」

いずれも、「恤刑」として説明しているのは、五年に一度、北京であれば三法司（刑部・大理寺・都察院）等の官が会同して、地方各省であれば大理寺・刑部から官を派遣して当該地方の巡按御史や巡撫と会同して、それぞれ集中して審理を行い、多くの罪囚を減刑執行あるいは釈放する手続である。五年に一度実施されることから、在京の監獄を対象とする場合「五年大審」と、また地方の監獄を対象とする場合「五年審録」と称することもあった^⑥。

明朝は地方の司法行政監察システムを整備し、その一環として「五年審録」手続を創出した。谷井陽子氏は五年審録について次のようにまとめる^⑦。明朝は正統六年に中央司法機関から官僚を派遣して地方の監獄にある罪囚を審録させたのを端緒として、繰り返し官僚を派遣した。ただ当時の官僚の派遣は不定期的であり、司法監察という目的からするとその実効性に疑問が残った。そこで実効性を高めるために、成化一七年に五年審録に改めた。明代の五年審録は継続して実行されていたと、谷井氏は述べている。おそらく地方と連動するようにして、京師の五年大審手続も整備されたのであろう。明朝はこの他例えば、京師の死罪秋後処決の罪囚を対象に執行前に再度審理を加える「朝審」や、地方の死罪囚を対象に立秋の頃に巡按御史が中心となって進める審決手続（清代における「秋審」の淵源となる）、また、恤刑と同じような効果を与える手続として熱暑の頃に行う「熱審」等の手続を相次いで整備した^⑧。

清朝はこれらの手続を導入した。しかし、他の手続が清朝を通じて実施されていくのに対して、恤刑のみ康熙初期にはやくも廃止される。雍正『会典』はなお康熙『会典』の記述を受け継ぐが、乾隆『会典』においては「恤刑」の項はなく、清朝後半の嘉慶・光緒の『会典』は、「恤刑」の項目をたててはいえ、そこで説明されるのは「停刑」^⑩

（一定の時期の刑の執行を停止する）・「減刑」（炎暑の時期に杖罪以下を減免執行する、いわゆる「熱審」をさす）・「停遣」（一定の時期の軍流發遣等の罪犯の解送を停止する）・「停勾」（秋審勾決を停止する）・「減等」（秋審で繰り返し審理された罪犯の一部を減刑執行する）・「大赦」であり、もはや「五年大審」・「五年審録」は含まれない⁽¹⁾。

恤刑は明朝において久しく実施されていた手続である。また清朝も導入している以上は、この恤刑手続に何らかの有用性を見出していたと考えるのが自然であろう。しかしながら清朝は短期間でその対応を変えた。清朝において恤刑手続が短期間で姿を消した理由は何か。その原因を探ることは、清朝の（とりわけ初期の）司法システムの特徴を解明する糸口となるのではないだろうか。

この問題には、恤刑を廃止する際の議論から考察を加えるのが、直接的でもっとも適当な手法である。しかしながら、康熙初年に関しては史料が乏しく、いかなる議論が恤刑廃止の背景にあったのか詳しく知ることはできない。そこで本稿では、第一節でまず清朝における恤刑手続の導入の経緯を明らかにする。導入に際しては様々な議論があり、当時の官僚たちが恤刑にいかなる期待を寄せていたのか、またいかなる点を問題として認識していたのかが判明するであろう。次いで第二・三・四節では、順治一二年から実施された恤刑の実態を、恤刑実施に関連して提出された上奏等を利用しながら整理し紹介する。恤刑手続は予定どおりに進んだのか、問題はなかったのかについて分析することとて、恤刑の理想と現実とが明らかになるだろう。第五節では恤刑の廃止を、恤刑と前後して導入されその後清末まで用いられていく熱審や秋審との関連から考察する。以上の方法で、恤刑廃止の背景を間接的にではあるが検討する。

なお、史料引用に際して、不明瞭の箇所および欠落の箇所は「□」で示している。

一 清朝における恤刑手続の導入

清朝が北京に入城し、統治体制を徐々に整えていく中で、漢人官僚は明朝において実施されてきた種々の手続、例えば律例の作成頒布や在京朝審・在外秋審などを、清朝においても踏襲して実施するよう求めた。¹²⁾ その中で、恤刑もまた再開が奏請され、すぐに実施が定まった。

順治元年に覆准した。恤刑官員はまさに五年に一度派遣すべきである。廉明なる者を慎重に選り派遣する。

〔順治元年覆准、恤刑官員応五年一差、慎選廉明者差往。¹³⁾〕

しかし、おそらくこの段階では方針として定まったに過ぎず、実際の実施に直接結びつかなかったと考えられる。

その後、順治四年に、大理寺卿王永吉等が五年審録の実施を奏請している。王永吉は次のように述べる。

臣等は次のように考えている。すなわち、好生は天地の大徳であり、欽恤は堯舜からつづく至仁である。故に夏の禹王は罪を泣き、殷の湯王は網を解いた。古より聖明の君で徳を尊び刑を緩めることを一番の務めとしなかった者はいない。……清律頒行の前の未開で混沌としていたころには、恐らく在外の有司はいかなる場合であれ重罰を用い、天地の元和を傷つけることがあった。のみならず、今、律の頒布以後には、また恐らく書いてある文言にとらわれてこじつけて苛酷な刑罰を科しており、衷矜の本意に重ねて違っている。まったくもって彼らは知らないのだろうか。律が一度成立したとしても、情はもともと様々である。舜典は「罪の疑わしきはこれを軽くす」といい、また「その無辜を殺さんよりはむしろ不経を失せん」といっている。欧陽脩は「獄を断ずるものそ

の生を求め而して得ざれば則ち之を死す」といつている。なんと敬服すべきであることか。これこそが刑をくだしつつも恤する（あわれみをかける）ということなのだろう。古からこのようであった。近ごろのことについて調べたところ、前明王朝に恤刑一差があった。直省に分行して、一件一件審録し、聴断すること明允であったので、自ずと多くの囚人が生を全うした、という。しかし我が皇上の御極以来、なお未だ挙行していない。伏して、刑部に勅を下し旧例を查明させるように請う。

〔臣等窃惟、好生者天地之大德、欽恤者堯舜之至仁。故大禹泣罪、成湯解網、自古聖明之君、無不以尚德緩刑為首務。……清律未頒之前草昧初開、既恐在外有司治乱用重、有傷天地之元和、即今頒律以後、復恐拘牽文法附会刻深、重違衷矜之本意。殊不知、律雖一成情原百出。舜典曰罪疑惟輕。又曰與其殺不辜寧失不經。歐陽脩曰斷獄者求其生而不得則死之。欽哉欽哉。惟刑之恤哉。自古已然矣。近考前代有恤刑一差、分行直省、逐起審録、聴断明允、自多全活。我皇上御極以来、尚未舉行。伏乞勅下刑部查明旧例。〕

皇帝の仁徳によってあわれみをかけ刑罰を軽減することは古来の「聖明之君」の方針を受け継ぐことである。にもかかわらず、在外の官員たちは逆に嚴罰で臨んでおり、なんとかして在外の獄囚にあわれみを施し救わなければならない。その方策として、実際に前王朝である明朝が実施していた恤刑を実施するべきだ、と王永吉は主張する。すなわち、王永吉は理念的な意味において清朝支配の正統性を強調する効果を恤刑に期待している。この奏請に対しては、刑部が実施に向けての具体的な検討を加えている。

該臣等は次のように考える。恤刑について五年に一度「官僚を」派遣することは往例が開載しており、甚だあきらかである。すなわち冤枉を弁明することは、必ず行ふべきであつて易えるべきではない。いわんや、皇上が御

位に就かれて四年目にして克寛克仁であるからには、恤刑という一政は例に照らして修挙するべきである。大理寺の臣が奏請した内容は、誠に皇上および皇叔父摂政王の欽恤の至意である。例を調べたところ直省は一五カ所であり、臣部（刑部）は刑部の郎中および員外郎を二三員、大理寺の寺正副二員をそれぞれ派遣するべきである。伏して、臣部に勅を下して、派遣すべき官員ならびに彼らをどの地方に派遣すべきかについて調べさせ具題させ、彼らを各直省に向かわせ恤刑を行わせるように求める。それによって皇仁の浩蕩をさらに広めるのである。

〔該臣等看得。恤刑伍年一差往例開載甚明、乃弁明冤枉必可行而不可易者。況皇上御極肆年克寛克仁、則恤刑一政照例修挙。如寺臣所請、是誠皇上・皇叔父摂政王欽恤之至意也。查例省直拾伍処、臣部差郎中員外拾參員・大理寺寺正副貳員、状乞勅下臣部查応去官員併地方具題、前去各省直恤刑、用広皇仁之浩蕩耳。〕

この上奏には「該部に差すべき官を調べさせ具題させる〔□著該部查応差官員具題〕」との旨が下っており、順治帝（および摂政ドルゴン）は刑部の上奏を裁可している。以上の展開からするとあたかも実施に向けて清朝の皇帝・官僚が動いたように見受けられるが、しかしこのときも結局は具体的な実施には至らなかったと推測される。審録手続が実施されればそれに伴い残るはずの様々な檔案史料の存在が全く確認できないこと、またこの後も恤刑実施の奏請が繰り返しだされることがその理由である。

その中で、順治八年を起点として五年ごとに官僚を派遣すること、すなわち順治一二年からの恤刑の開催が決定される。この決定の経緯は詳らかではないが、順治一〇年に刑部尚書李化熙が提出した上奏文に言及がある。

〔順治〕一〇年四月、慎刑五事について条奏した。一、恤刑の道は速かに行うべきである。調べたところ、明朝の会典は毎年の熱審のほかに五年に一度大審を行うとしている。これを恤刑という。……前に臣部の題請を経て、

「順治八年をもつて始と為し五年に一たび派遣する」と命じる旨を奉じた。但し今や直省の刑獄は無冤を保つのが難しい情況にあり、もし必ず順治一二年を待つてから派遣するのでは、轉じて恐らく泣罪解網の恩にともにあずかることはできないであろう。そこで、今年より始めてただちに廉幹の官員を遣わし分けて直省に向かわせ、例に照らして矜恤させることを請う。……上奏文を受け取る。部に下して議して行わせる。ただ恤刑についてはなお前の旨に遵う。

〔十年四月条奏、慎刑五事。一、恤刑之道宜速。查会典每年熱審外、五年又一大審、謂之恤刑。……前經臣部題請、奉旨以順治八年為始、五年一遣。但現在直省刑獄、難保無冤、如必待順治十二年再遣、轉恐不得同沾泣罪解網之恩。請自今年始、即遣廉幹官員分行直省、照例矜恤。……疏入、下部議行、惟恤刑仍遵前旨。〕⁽¹⁵⁾

李化熙は「難保無冤」を指摘するが、おそらく、獄囚に対して正しい手続で処理せずに勝手に實際よりも重い刑罰を科す冤獄や、事案を処理しないままに長年放置している滞獄などの問題が存在したのであろう。李化熙の恤刑早期実施の奏請は認められなかったが、かかる問題が存在するならば、恤刑の実施と否とに関わらず、それを放置するわけにはいかない。順治十一年一月七日に、刑部郎中劉芳聲は、畿北の各府の重囚で、北京に報告された事案はわずか五件であり、総督・巡撫・巡按御史が裁可して結果を待たせている事案が二、三百件以上あるとして、各問刑衙門が重案について北京に報告する際の期限を設けるべきであると訴えた。⁽¹⁶⁾この奏請に対して皇帝は次のように答えている。

上奏に據れば、畿北各府の重犯の獄情について、未だに京詳を経っていないものは、ついに二三百起に至っている。その多くは順治元年二年の旧案であり、供述の言葉は食い違い、情罪は未だに一致しない。そのために、獄底に沈滞して、理を申し立てる由がない。承問の各官ははなはだ悪むべきである。察議具奏せよ。以後各督撫および

問刑衙門は一応の獄情文卷が未結であれば、速やかに審明し、延緩して冤獄を重ねて増やすことのないように確かに務めよ。もしさらに久しく奏詳しないものがあれば、的察して処治する。刑部に知らせよ。

〔據奏、畿北各府重犯獄情、未經京詳、竟至二三百起、多係元二年旧案、招詞參錯、情罪未協、以致沈滯獄底無由申理。承問各官好生可惡。著察議具奏。以後各督撫及問刑衙門、一応獄情文卷未結、的務作速審明、不得延緩重茲冤獄。如再有久不奏詳的察來処治。刑部知道。〕⁽¹⁷⁾

皇帝はこのように事案処理の遅延には処罰を与えると言明することで、官員たちに速やかな処理を促し、それによって滞獄を解消しようと考えた。ただ、具体的な処罰規定が定められることはなく、あるいは訓示程度のものであったのかもしれない。とはいえ、順治一年後半にかけてこの論旨を援用しつつ旧案について審理した旨を報告する上奏文が複数残存しており、⁽¹⁸⁾一定の効果を有したと考えられる。

この方法に対して、恤刑こそが滞獄解消の最良の方法であるという反論が出された。刑科給事中陳忠靖ははやくも一月一四日に次のように奏請する。

ただ蘇理の法は専官を派遣することを貴ぶ。凡そ外省の大小の獄情は、事に専属がなく、時に限期がない。それゆえに、事案がすでに決しているにもかかわらず、また事案が未だに決せず、ならべて獄底に沈むのである。たとえ督撫が厳しく催促しても□は必ず州県よりして道序を上下往返し、ややもすれば歳月を経て、恐らく最後には十年の積滞が生じ、すぐには整理することはできないだろう。臣がおもうに、速やかに恤刑の典を挙行してはじめて実効がある。蓋し恤刑は京官であればともと瞻狗（私情にとらわれる）することはなく、かつ責任には専属があり、また期限があるので、自ずと稽遅することはないであろう。調べたところ、恤刑の典に

ついては昨歲に「一二年に挙行する」という旨を奉じた。ただ、一日も早く挙行し、息も絶え絶えな獄底の民に一日も早く仁に沾させるべきである。そうでなければ、一歳の遅れによって、恐らく圜圉や桁楊に死んでいくものはすでに浩蕩の洪慈にあずかることができないだろう。

〔但蘇理之法、貴遣專官。凡外省大小獄情、事無專屬、時無限期、所以有案已決而仍未京詳・案未決、而併沉獄底。即督撫嚴行督催□必由州県而道庁上下往返、動經歲月、恐終不能起拾年之積滯而使之立清也。惟速舉恤刑之典、方有実効。蓋恤刑京官也、既無瞻徇、且責有專屬、又有限期、自無稽遲。查恤刑之典、昨歲奉旨著拾貳年挙行。但蚤行一日使奄奄獄底之民蚤沾一日之仁。否則一歲之遲、恐死於圜圉桁楊者、已不能復沐浩蕩之洪慈矣。〕

「蘇理之法」とは獄囚を滞獄からすくい挙げ、また滞獄を整理する方策を意味する⁽³⁰⁾と考えられる。すなわち、陳忠靖は、先の決定では通常の手続の中で処理期限を嚴格にすることで滞獄の解消を目指しているが、通常の手続自体が、事案処理に関する責任の所在や事案処理の期限がはっきり定まっていないという問題や、また督撫が催促したところで州県と道庁との間で何度も駁回を繰り返されれば結局は時間がかかってしまうという問題を孕み、結局は滞獄を発生させてしまう。それに比して恤刑は、京官であるが故に周囲の言に囚われずに判断することができ、また責任の所在や期限がはっきりしており、遅延なく事案処理をして滞獄問題の解消に資すると評価する。この奏請が直接の契機になったのか判明しないが、順治一年の恤刑実施が決まり、五月には恤刑官および派遣する地方が定まっている⁽³¹⁾。

当時都察院左都御史となっていた王永吉は、この恤刑実施決定にあわせ、実施方針に関する五つの事項を提言した。そのなかで、刑部・大理寺の官員が地方に派遣されることの有用性を中央の三法司との関係で主張する。

京詳は瞻徇を許さない。この十年あまり、総督・巡撫・巡按御史が審問した凌遲処死・斬・絞といった重罪は、

すでに転じて京詳することになっている。「三法司核議」と旨が下った者について、刑部・都察院・大理寺の満漢の官が、原招に照らして情罪を参酌し軽重を分別して律を援引して上請しているが、本犯に対して面訊しているのではない以上は、どうして冤枉が全くないことがあるのか。今、恤刑官は一件毎に親しく審理する。もしその場での口供と原招とが符合しない場合には、当然にかわりに冤枉をすさなければならぬ。もし派遣された司属が堂官を氣にかけて京詳を翻駁することをしないならば、科道官に実を指し示して糾参することをゆるせばよい。内外が虚心にして公平であるならば、出入もまた明允と称せるだろう。伏して聖裁をまつ。

〔京詳不許瞻徇也。拾年以來督撫按問過凌遲斬絞重罪、已轉京詳、及奉旨下三法司核議者、刑部・都察院・大理寺滿漢官、止照原招参酌情罪分別輕重引律上請、本犯未曾對案、豈能全無冤枉。今恤刑逐起親審、儻口供與原招不符、自當代為昭雪。若差去司属瞻顧堂官不肯翻駁京詳、聽科道官指實糾参。庶内外一秉虛公出入俱稱明允矣。伏候聖裁。〕

三法司は、巡撫から送られた死罪案件を審理しなければならない。しかしながら、書面による審理が行われるのみであるため、冤枉の可能性は皆無ではない。むしろ恤刑官が地方に赴き、罪犯をはじめ関係者から直接事情を聞いて審理した結果、それが正されることもあり得る。王永吉はこのように説き、中央における処理にともなう問題点を改善する機能を恤刑に求めた。

しかし、様々な期待が寄せられていた一方で、八月には、恤刑実施に対する反対意見が大学士范文程等から出された。

官員を派遣して恤刑をさせるとするのは、我が皇上の刑獄を慎重にして民を視て傷むがごとき至意を仰ぎ見るお

もいである。しかしながら、臣等は伏して思う。以前、滿漢の大臣を派遣して巡方させることを議論した折に、民を騒がせることを慮って、結局は派遣を中止した。今、四方の水旱の災害は、またもやあちこちで報告されており、民生の困苦はますますひどい状態になっている。誠に恐れながら、各官を派遣するのは地方にさらなる煩擾をもたらす以外の何ものでもない。まさに暫し派遣は停止すべきである。現に収監されている重囚については、それぞれの巡撫に勅を下して詳細に推勘させ、向來のような因循はさせず、もし可矜可疑なるものがあれば上奏して請旨定奪させることを請う。

〔差遣恤刑、仰見我皇上慎重刑獄視民如傷至意。臣等伏思、前議遣滿漢大臣巡方、慮有擾民而止。今四方水旱災傷、又紛紛見告、民生困苦益甚。誠恐差出各官不無煩擾、亦應暫行停止。其見監重囚、請勅各該巡撫詳細推勘、勿似向來因循、如有可矜可疑者、即具本請旨定奪。〕⁽²⁴⁾

中央から地方へと官僚を派遣するのは地方に大きな負担を迫らせることになる。災害に苦しむ地方民衆にこれ以上の負担を迫らせないためにも、恤刑官を派遣するべきではない、と范文程は主張する。⁽²⁵⁾しかし恤刑官を派遣しなければ、滞獄の問題によって地方監獄の囚人の苦しみが長引く恐れもある。そこで、范文程は、そうであるならば地方の巡撫が恤刑官のかわりに厳密で慎重な審理を行うようにすればよい、と述べる。この見解が容れられて順治一一年の恤刑実施は中止となった。

このまま恤刑が実施されないのではないかと懸念した官僚たちは、その後も恤刑の実施を訴えて上奏文を提出している。例えば、水旱の災害があるならば、恤刑を実施することで和氣が充ち災害もおさまるだろうという意見や、あるいは各省の官僚に委ねたとしても、彼らは他の事務処理で多忙であるため司法業務のみを進めるわけには行かず、

また成案（自分たちがなした判断）に拘泥するといった弊害もあり、結果として滞獄の解消を期待できないという意見も出された。⁽²⁶⁾これらの運動が功を奏したのか、結局は、次節以降に見るように順治一二年には恤刑が予定どおり実施されることとなった。

二 恤刑の具体的手続

(一) 手続の枠組み

順治一二年七月一〇日に恤刑官が選定され、向かうべき地方が定められた。

大理寺左寺正柯士芳を直隸へ、右寺正甯承勲を広東へ、刑部郎中劉士傑を江南へ、王度を江北へ、呉顥を福建へ、陳丹を陝西および四川へ、蕭家芝を山西へ、劉允燦を山東へ、霍炳を江西へ、員外郎侯方夏を浙江へ、方享咸を湖広および広西へ、周茂源を河南へ、それぞれつかわし、恤刑させる。

〔遣大理寺左寺正柯士芳往直隸・右寺正甯承勲往広東・刑部郎中劉士傑往江南・王度往江北・呉顥往福建・陳丹往陝西四川・蕭家芝往山西・劉允燦往山東・霍炳往江西・員外郎侯方夏往浙江・方享咸往湖広広西・周茂源往河南、恤刑。⁽²⁷⁾〕

恤刑官の選定に際しては、能力の有無はもちろん、在任の年月もまた考慮要素となった。また同じ清吏司から複数名を派遣しないことも前提となっていたようである。

すなわち、題するところの各清吏司の員外郎について、同じ清吏司の郎中がすでに派遣が定まっております重ねて派

遣することが不都合である者を除いたのは、もともと清吏司の事務に誰か辦理する人間が必要だからである。

〔即所題各司員外、除本司郎中已經奉差不便重差者、原以司事需人辦理故也。〕⁽⁸⁾

恤刑官にはそれぞれ皇帝から勅諭が下される。台湾中央研究院には勅稿及び恤刑官たちが返却した勅諭が複数残存する。⁽⁹⁾ 例えば山西恤刑官に下された勅諭を例に挙げると、以下の通り（丸数字は筆者）。

皇帝勅諭刑部山東司郎中蕭家芝

①朕以刑獄重大民命攸関、慮有冤枉致傷和氣。茲特命尔前往山西、会同巡按御史、督同各府衛等衙門掌印及理刑官、遵照該部節題事理、即將見監一應輕重罪囚、從公審錄。

②死罪情真罪当者、照旧監候聽決、情有可矜罪有可疑及事無證佐可結正者、具奏處置。若係原問官故入人死罪、会同巡按題參。流徒以下俱免追究。充軍人犯、除解免着伍外、其餘不分曾否詳充及雖經定衛尚未起解、如有應積應減者、会同巡按酌量議妥奏請、不得竟自發落。又軍罪有不用全例摘引例文、及不分首從濫坐者如未發遣、即附入矜疑疏內、題請解積。雜犯死罪准徒五年者、并已徒而又犯徒、律該決訖所犯杖數、總徒四年者、各減去一年、例該枷號者就便釈放。其餘徒流等罪、各減等審擬發落。答罪放免。凡賊犯除侵盜官銀五十兩糧一百石以上者、照旧監追。如還官銀不足五十兩并入官給主百兩以上各賊、監追至五年、或正犯身故逮及子孫勘無家產者審實具奏開豁。各處查盤坐贓追賠銀糧草束、亦聽查勘正犯存亡・家產有無、具奏裁奪。

③每一府事完、即便奏請、不必等候通完。

④審過重囚、奉有欽依饒死者、撫按官即遵照發落。如有二司等官、故違欽恤、敢為翻異、致人於死者、刑部察訪參奏。

⑤所至知府執属官礼、庭参免行跪拜、同知以下俱照常行礼。録囚聽斷、母信左右採訪、母拘督撫按成案、母偏狗原問、母拘礙京詳、母将大計貪贓問革官吏・及拳監生員大奸大蠹已結正者、出脱弁復。其撥給吏典、務要嚴加鈐束、母令作弊生事。

⑥仍遵題定入境出境日期、先具不違揭帖、送部察考、恪遵限期、竣事復命。

⑦該部查前後所奏、部覆依准改駁件数多寡通行考核、具奏处分。仍聽堂上官不時体訪。如在差不諳刑名、行事乖方者、不待差滿即行参奏降黜。

⑧尔受茲委任、宜明允存心虛公斷事、可矜可疑詳加推勘、大冤大枉立為伸理、仰体朕欽恤至意、方称任使。如輕忽民命、顛倒是非、縱役招搖、徇私鬻獄、国憲具存、必不輕貸。尔其慎之。故諭。

順治一二年八月一二日

以下、順に検討する。

①恤刑の下命と担当地域

勅諭は個別の地方名を挙げて、各恤刑官に当該地方での恤刑を命じる。審録の担当地域については、前述のように、直隸、広東、江南、江北、福建、陝西および四川、山西、山東、江西、浙江、湖広および広西、河南をそれぞれ一人の恤刑官が担当することが定まった。今回は地方を対象にした恤刑であり、京師監獄に対しては恤刑は実施されない³⁰⁾。

明会典では恤刑官一人の担当地域について、

清朝初期における「恤刑」（五年審録）について

在外に関しては、刑部・大理寺の官僚を派遣して、分けて審録にあたさせた。北直隸に一員、南直隸および江南・江北にそれぞれ一員、浙江・江西・湖広・河南・山東・山西・陝西・四川・福建・広東・広西にはそれぞれ一員、雲南および貴州にあわせて一員とし、それぞれ勅を奉じて、巡按御史と会同して事を行わせた。

〔其在外、則遣部寺官、分投審録、北直隸一員、南直隸・江南北各一員、浙江・江西・湖広・河南・山東・山西・陝西・四川・福建・広東・広西各一員、雲南・貴州共一員、各奉勅会同巡按御史行事。〕⁽³¹⁾

と記述していることから、清朝は派遣する官員それぞれの担当地域については明朝の前例を踏襲しつつも、異なる配分を定めたことがわかる。そのうち、当時いまだに清朝の版図に入っていなかった雲南・貴州は、当然のことながら審録の対象から外される。陝西と四川、湖広と広西はそれぞれなぜ一人の恤刑官があわせて担当することになったのだろうか。

恤刑官の選定に先立つ、順治一二年一月二四日に王度が恤刑官の分担について次のように提案している。

原題によると、一二の省に官一二員を用いるとし、江南および四川もまたそれぞれに一員を充てていた。しかしながら、四川は事の簡便なること江南と比較するにその十倍にとどまらない。そのためこれまでの例として、江南は巡按御史を派遣しさらに学政使を派遣し、二員によって仕事をしている。他方で四川省の場合には秦督（當時は川陝三辺総督）にそのすべてを帰している。臣が愚見するに、このたびの恤刑官の派遣に関しても、四川の分については陝西担当の恤刑官に帰すことにして、四川の分の官僚を江南の恤刑に振り分けてはいかがだろうか。
〔原題拾貳省用官拾貳員、江南・四川亦各壹員。乃四川事簡較江南不啻什百、往例江南按差学差皆貳員、而蜀省久歸秦督。臣愚以為恤差亦宜併歸秦差、即以蜀省所減之官分恤江南。〕⁽³²⁾

恤刑官の担当配分を決定する際にこの提案が直接採用されたのかまでは判明しないが、一部の官僚の間には、陝西、四川、湖広、広西は事案が少なく、審理にそれほどの労力・時間はかからないという認識があったと考えられる。おそらくその認識を反映して、これらの地域に関しては、一人の恤刑官に複数の省を受け持たせることにしたのである。ただ、そうしてできた余剰人員を事案が多いと考えられる他の地域にまわすことはなかった。上述の一つの清吏司から郎中と員外郎とを重ねて派遣しないという方針と併せて考えると、通常の業務もさることながら、恤刑を通じて多量の事案が北京にもたらされることが想定され、それらの処理の中心となる刑部を手薄にすることに不都合を感じていたのだろう。

恤刑官は、各地方での審録の際には、当該地方を担当する巡按御史とともに、各府衛等衙門の掌印および理刑官をひきいて、現在監獄に収監されているすべての罪囚を対象に審録する。もちろん巡按御史は他に公務を有しており、同席して審録を執り行えない事態も容易に推測される。そこで、恤刑官に任命された官僚たちは、かかる事態になったときの対処法をはっきりさせるよう求め、それをうけて刑部は、巡按御史がともに審理できない場合には、明代に倣って恤刑官がひとりで府州県の官員を集めて審録することをゆるすようにと奏請し裁可をうけている²⁸⁾。

②各罪囚の処置について

死罪囚は、審録の結果、「情真罪当」、すなわち罪情に不明瞭な点がなく、当該罪情には死罪が相当であると判断した場合にはこれまで通り収監し、「可矜」・「可疑」、すなわち死罪にするには罪情にあわれむべきあるいは疑義がある場合、および事案に証拠・証人がなく判断を下せない場合には、その旨報告して指示を仰ぐ。また充軍罪犯について

も、いまだに護送の途についていない罪犯で釈放・減刑すべき場合には適当な処置を、また擬罪の際に律例の全文を引かず部分のみを摘み取って引用した、あるいは首従を分けずに擬罪していたなど、手続に不備があった場合には釈放を、それぞれ奏請する。このように、刑罰の減免に際しては最終的には皇帝の裁可を必要とした死罪・充軍罪に対して、雑犯死罪以下については恤刑官および巡按御史限りでの機械的な減刑が可能であった。また贓犯で、正犯の存否や家産の状況などからその贓物の返還の免除を検討するにあたって、奏請して皇帝の裁可を仰ぐ必要があった。

③ 審録の単位

すべての審録終了後に報告書を提出するのではなく、一つの府毎に提出することが命じられる。このことから審録は府単位ですすめられることが推測される。

④ 審録後の死罪囚の処遇

審録を経て死罪の減免が皇帝によって認められた罪囚は、巡撫・巡按御史が遵照して減刑執行・釈放しなければならないとし、彼らを勝手に死刑執行することを禁じている。

⑤ 審録をする際の方針

勅諭は知府以下の官が恤刑官に対して取るべき礼を規定する。恤刑官は刑部郎中・刑部員外郎・大理寺寺正であり、そしていづれも漢人官僚と考えられるため、その官品は知府よりも下に位置する。⁽³⁴⁾とはいえ、恤刑官は皇帝の勅諭を

奉じ、知府以下の官を率いて審録を進めなければならない。お互いの立場を明確にするために、勅諭は取るべき礼について規定したと考えられる。また、恤刑官が原問官もしくは関係者たちとともに審理に当たることおよび恤刑官自身が本来刑部・大理寺に属する身分であることが、審録を実施する上での障碍となりうる。というのも、彼らが審理する事案にはそれぞれにかつて審理に携わった官がいる。とりわけ督撫が審理判断し、あるいは原案を作成し北京に送付してしまっている場合、さらには北京の刑部・大理寺が審理してしまっている場合、それらの判断に拘泥して公正な判断ができなくなるのではないかと心配された³⁶⁾。そのため勅諭は取えて、「左右の採訪を信じることなく、総督・巡撫・巡按御史の成案に拘泥することなく、原問官を庇い立てすることなく、京詳に拘泥することなく」審録を進めよ、と述べるのであろう。

⑥期限の遵守

恤刑官は入境及び出境の日付を報告しなければならない。さらにすべてを終えて帰京したあかつきには、拝受した勅諭を皇帝に返還し復命しなければならなかった。

期限について、この勅諭の中では言及はないが、康熙『大清会典』によると清朝は次のように規定していた。

直隸：六ヶ月

山東：八ヶ月

山西・河南：九ヶ月

浙江・江西・江南・江北：一ヶ月

清朝初期における「恤刑」（五年審録）について

福建・広東：一二ヶ月

陝西と四川・広西：一四ヶ月

また、「北京を出た後、その土地の遠近によって、期限を分別する〔出京之後、按地遠近、分別限期〕」と記載があることから、期限の起算点はそれぞれの恤刑官が北京を出発する時点であったことが分かる。⁽³⁶⁾そしておそらく北京に戻り復命することで、審録のすべての日程が終了した。江北恤刑官は日数の内訳について次のように述べている。

臣は江北を審録するのに一ヶ月内とする勅命を奉じた。巡按御史が入境出境の際には百十日、および道々を巡行する際には四十日であることに照らして、計五ヶ月を除き、臣がその場に行つて審録を執り行う期間は、わずかに六ヶ月である。

〔臣奉勅命審録江北原限拾壹箇月内、除照按臣入境出境壹百壹拾日、及巡行道路肆拾日、共計伍箇月、臣按臨辦事僅陸箇月。〕⁽³⁷⁾

このように、それぞれの日数は、北京から各地方への往復に要する日数、当該地方を移動する日数、および審録に要する日数をすべて合算した上で、設定された。これに対して明代の審録期限は、

北直隸：三ヶ月

山東・山西・陝西・河南：四ヶ月

江南・江北・浙江・江西・福建・湖広：五ヶ月

四川・両広・雲貴：六ヶ月

であり、⁽³⁸⁾清朝は明朝が規定していた時間の二倍からそれ以上の時間を予定した。清朝がいかなる計算に基づき上記の

期限としたのか確認することはできないが、当時の社会情勢に加え、明代における実績をふまえて、審録の実効性をより高めるために期限を長くしたものと推測される。

⑦ 恤刑官の処分の可能性

恤刑官はただ審録すればよいというわけではない。恤刑官が可矜・可疑・改擬と報告した事案は、北京で刑部の（ただし、後述のように、実際には九卿詹事科道等官の会議、後に三法司の）審理を経ることになり、そこでの依准なし改駁の多寡によって、恤刑官の能力が評価される。改駁の量によっては処分もありうる。

⑧ 公正な審録を

恤刑は恤刑官の個人的評価にのみかわる問題ではない。彼は皇帝の徳を体现するために派遣されるのである。したがって、適当なことは許されず、慎重に審理を進めることが求められた。

（二）実際の恤刑手続

勅諭を受け取った恤刑官たちは、八月末以降（八月二五日頃か）にそれぞれの担当地域へと出発した。⁽³⁹⁾ 各地方への到着は北京からの遠近によってそれぞれ異なり、恤刑官たちは到着後ただちに審録を開始した。審録は順治一二年末から一三年にかけて本格的に実施されていく。

清朝初期における「恤刑」（五年審録）について

例えば、四川恤刑官陳丹が報告書の中で、

臣が四川に到着したところ、按察司から、順慶および龍安の二つの府に属する「州県には」罪犯はなく、ただ保寧府に属する閬中県には、盜賊が殺人も行ったという事案の罪犯で、杜啓倫なる一犯が現在収監されており、また潼川州に属する塩亭県には普通に生活をしていて「強盜などの事情はないにもかかわらず」殺人を行ったという事案の罪犯で、何応なる一犯が現在収監されているという回答をうけとった。そこで閬中・塩亭二県に命じて前項の二事案の囚犯およびそれぞれの原「裁判」文書と審理に関係する人證を臣のもとに呼び集めた。臣は巡按御史高民瞻と会同し、保寧府知府項錫胤、「保寧府」理刑推官帝式、閬中県知県吳道煌、署塩亭県事保寧府通判楊芳等を督同して、公正に審録した。

〔臣至四川、移准按察司回称、順慶・龍安貳府属、並無罪犯、惟保寧府属閬中県見監壹起盜賊打死人命事絞罪壹名杜啓倫、潼川州属塩亭県見監壹起生活打死人命事絞罪壹名何応等因、准此行據閬中・塩亭貳県、解到前項貳起囚犯并各原卷干審人證到臣。臣謹会同巡按御史高民瞻、督同保寧府知府項錫胤・理刑推官帝式・閬中県知県吳道煌、署塩亭県事保寧府通判楊芳等、從公審録。〕

と述べていることから、審理は次の手順で進められた。按察司がまず審録すべき事案のリストを作成する。按察司がいかにしてリストを作成していたのか詳細はわからないが、おそらく恤刑官の到着以前に府を通じて各州県に命じて獄囚のリストを提出させたのであろう。恤刑官は按察司から渡されたリストをもとにして各州県から罪囚や証人を呼び集める。そのうえで、これまでの裁判記録を参考にしながら、巡按御史および知府・府の理刑推官および当該罪囚を収監していた州県の知州・知県とともに直接審理した。この場合、保寧府および潼川州の審録が同時に行われてい

る。ほかにも近隣の複数の府の罪囚をまとめて審理したことを報告する上奏文があり、必ずしもひとつの府毎に審録手続が進められたわけではない。⁽¹⁾

この史料からは審録の場所についてははっきりしたことは分らないが、前述のように規定の日数に省内を移動する時間も含まれていることから、恤刑官が省城から動かずにそこに罪囚たちを集めて審録したのではなく、いずれかの府城に恤刑官が移動し、そこに所属の州県から呼び集めて審録したのであろう。恤刑手続を徹底するならば、恤刑官自身が直接監獄を査察する必要があるが、これに関する史料はない。ただ、上記の手続の流れや時間的な制限から考えると、恤刑官がすべての監獄を直接見て回ることとはなかったと考えられる。

各州県の監獄に収監されていた罪囚はすべて審理の対象となった。例えば山西の恤刑官は、審理を加えた上で、矜疑として報告すべき人犯、あるいは改擬すべき罪犯：七八名

斬絞死罪で矜疑あるいは改擬すべき罪犯：七八名

雜犯死罪で減刑執行した罪犯：九名

徒罪で減刑執行した罪犯：八名

杖罪で減刑執行した罪犯：二〇名

答罪・枷號・謫贓の罪犯：各州県衛の報告によれば、なし

と報告している。⁽²⁾これによると、斬絞死罪で矜疑であるあるいは改擬すべきであると報告された罪囚の数は抜きん出て多い。その上、雜犯死罪以下の罪囚は機械的な減刑が予定されていたことを考慮すると、史料の中に挙げられている数字の中には審理を受けたすべての罪囚が含まれていると考えられるが、それに対して死罪囚の中には情真罪当と

判断された者もあり、ここに挙げられた数字に彼らは含まれない。すなわち、数量的に見て審録の対象の大半が死罪囚であった。その上彼らに対しては逐一審理を加えなければならず、実質的にも審録のメインであった。ではなぜ、死罪囚がそれほど多かったのか。

当時死罪は次のような手順で処理された。事件発生後、州県の審理から始まり、順次上級官庁への上申・覆審が行われ、督撫及び巡按御史の審理を経て北京に報告される。北京では三法司の覆審を経て、皇帝が裁可する。立決であれば、皇帝は当該地方での執行を命じる。執行命令が当該地方州県に届き次第死刑が執行される。監候であれば、皇帝は巡按御史の再審理・具奏を命じる。巡按御史の再審理上奏の後、再度三法司の覆審・皇帝の裁可が行われ、減刑執行若しくは「秋後処決」が命じられる。秋後処決が命じられた罪囚を対象として、巡按御史はその年の霜降後冬至以前に地方で会審を開き、審理の上、情真（執行相当）と判断した場合には死刑を執行し、矜疑（減刑執行相当）と判断した場合には上奏し、情真ではあるが罪情は重大ではないと判断した場合にはなお監候とした。⁽⁴⁾史料からは、巡按御史の再審理および具奏を経て、北京からの結果を待つのみ的事案も恤刑の対象となっていたことを確認することができる。⁽⁴⁾このように、当時の手続上、死罪案件の処理には時間を要し、罪囚は長く監獄に留め置かれる。このことが恤刑の対象として死罪囚が多かった原因の一つであったと考えられる。

そして、それ以上に直接的な原因として、滞獄の問題がある。すなわち、処理手続が進められることなく監獄に放置されることで死罪囚が累積した。残存する史料のなかで恤刑官が矜疑・改擬案件として中央に報告した死罪案件には、順治元年の事案もあり、当該事案は十年以上も完結しないまま監獄に留め置かれていたことになる。前述のように順治一一年には滞獄の解消を目的として事案の速やかな処理が命じられていたが、それでも古い事案はまだなお

残っていた。

斬絞死罪で恤刑官が矜疑であるあるいは改擬であると上奏した罪犯については、北京で九卿詹事科道官が会同して審理し（以下「九卿会審」と称す）、また後には九卿会審にかわって三法司が審理を加えた。未処理の古い事案が恤刑官の報告によって中央にもたらされることは事案の処理における遅延の存在が公になることを意味し、当該遅延に關係のある官僚たちは当然に処分されなければならない。皇帝はこの問題に「長年事案を完結しなかった該総督・巡撫・巡按御史等の官は、吏部に命じて察議具奏させる〔有年久不結的該督撫按等官、著吏部察議具奏〕」と下命しているが、当該事案が発生してから恤刑における審録まで時間があけばそれだけ督撫按を始めたとして官員は入れ替わっており、誰がその処理の責任者であったのか確認することは難しく、また相当数の官員が処分を受けることになる。そのためであろうか。結局は、順治一三年七月にだされた恩赦によって免議することになった。⁽⁴⁷⁾

三 恤刑における矜疑事案とその処理

恤刑ではいかなる事案にいかなる判断が下されているのか。分析に利用できる事案は恤刑官が矜疑として中央に報告した事案であり、その中には彼らが情真と判断した事案は含まれない。すなわち偏りがあることを念頭に、以下に整理し考察を加える。

【事案一】順治元年一〇月二十九日、孔自恩は弟孔自愛や村人張一第等とともに親戚の結婚式に赴き酒を飲んだ。帰路、孔自愛と張一第が言い争いを始め、それを後方で聞いていた孔自恩は張一第を殴りつけた。張一第は逃げ

清朝初期における「恤刑」（五年審録）について

帰り崖の密洞に隠れたが、追いついた孔自恩に磚で右耳根を殴られ、足を踏み外して密洞から落ちて、そのまま死んでしまった。

最初に審理した介休県は孔自恩を闘毆殺人として絞罪に孔自愛を餘人として杖罪（收贖）に擬して汾州府に上申した。汾州府は死因について殴られたためなのか足を踏み外したためなのか明確にするべきだと判断し、孝義県に覆審を命じた。孝義県は「孔自恩が磚塊を適当に投げつけたところ張一第の頭にたまたま命中してしまった。張一第は投げつけられる磚塊を避けようとして、酔っていたため足元がふらつき、崖の密洞から落ちて命を損なった。崖から落ちて命を落としたとはいっても、投げつけられる磚を避けたために死亡したのである」と述べて、孔自恩をなお介休県の擬罪どおり絞罪に、孔自愛を助毆として徒罪にそれぞれ擬して上申した。府はさらに平遙県に覆審させたが、こゝでも介休県の擬罪が支持された。そこでようやく府から道に上申され、さらに巡撫・巡按御史の審理をうけることとなったが、巡撫は「磚塊を適当に投げつけたら、たまたま命中した」という言葉は怪しく、死因をはっきりさせるべきであると判断して駁した。再度県・府から上申が行われ、巡撫・巡按御史が詳允して（議論の中身は不明）孔自恩を監候した。孔自愛については徒刑が執行されている。恤刑官は、そもそも死因についてはいずれも確証がないこと、また孔自恩は一回だけ磚を投げた（あるいは殴った）としているが傷は四ヶ所あり、供述と検屍結果が一致しないため、信獄（信ずるに足る裁き）ではなかったとして、疑であると報告した。¹⁸⁾

【事案二】朱敬宇は崇禎年間に王之讓（監故）とともに牛二頭を盗み、拿獲されて収監された。後に反乱軍がやってくる、朱敬宇と王之讓は脱獄して逃亡し、順治二年頃に、世間の混乱に乗じて、馮老漢（正法）や趙琰・趙八（盜首、監故）らとともに、強奪を繰り返した。順治二年閏六月一三日に段雪の家を襲った際には、驢二頭、

牛一頭、銀一五両および古い衣服等を奪ったが、朱敬宇に与えられた分け前は銀一両のみで、そのほかの贓物は王之讓・馮老漢・趙琰等が分け合った。彼等はさらに四〇餘の家々を襲い、その後次々と捉えられた。

滁州の蕭知州は朱敬宇を強盜得財として斬罪に擬して滁和道に上申したが、滁和道は「供述の内容は繁雜で事の先後が乱れており、律の援引及び擬罪は妥当ではない。出入の関するところであり、詳慎に判断するべきである」として駁して和州に審理を命じた。和州の廬知州は「強盜ですでに実行し財を得ていれば、その分贓が幾ばくもなくとも、法（ここでは律を指すと考えられる）をもって考えると、生かしておくことはできない」と上申し、滁和道はこれを總督・巡撫・巡按御史に報告した。督撫按は駁して覆審を命じ、またそのまま収監させていた。恤刑官は、牛を盗んで獄につながれ後に脱獄したのは罪としては輕微なものである、また、王之讓の供述の中に四〇回にもわたる強盜にかかわった犯人の中に朱敬宇の名が挙げられず、馮老漢の供述にも變転が見られることから、順治二年間の強盜に朱敬宇がかかわり銀一両を得たというのは根も葉もないことであると判断し、恩赦の前でありとりわけ清朝が江南を招撫した時期と重なることを理由に「矜れみ積すべきだ」と報告している^⑧。なお、『江南通志』によれば、順治二年頃の滁州知州で「蕭」を姓とするものは、順治二年から順治五年まで知州を務めた蕭琯のみであり、また和州知州で「廬」を姓とするものは、順治二年から順治三年まで知州を務めた廬汝□であるため、朱敬宇の拿獲および審理の時期は順治二年から三年頃である。

【事案三】順治五年七月一三日、吳茂・高昌は施愈が賊であると言いついて袋叩きにし、そこに陳盛も加わった。吳茂がひどく打ち据え、施愈は死亡した。施愈には兄施懋がおり、吳茂・高昌は訴えられるのではないかと恐れていたところ、八月四日に高昌は村で施懋に偶然会い、吳茂とともに村はずれに引っ張っていき、河に放り込ん

で溺死させたあげくに、屍を焼いてしまった。

この事案では、推問官が呉茂・高昌をまず擅殺として徒三年、陳盛を為従として徒二年半に擬罪して上申したが、巡撫もしくは巡按御史に駁された。次いで呉茂・高昌を同謀共毆人致死下手として絞罪に、陳盛を元謀として徒罪に擬罪して上申し、再度駁された。さらに、呉茂・高昌を謀殺人造意として斬罪に、陳盛を従而不加功として徒罪に擬罪した。しかし裁可をうける前に、順治八年一〇月六日に高昌が監獄で死亡したため、按察司が改擬して、呉茂を造意下手として斬罪に、陳盛を加功として絞罪に擬罪して、巡撫・巡按御史に上申したが、これもまた駁された。そのうち呉茂までもが順治九年一月二二日に監獄で死亡したため、陳盛を絞罪から首謀者「として斬罪」へと改めた。浙江では恤刑官が途中で死亡し、巡按御史が代わって審録を進めることになっていたが、巡按御史はこの事案に対して、直接手を下した元兇である呉茂・高昌の監斃によって陳盛が死罪に擬されたこと、両命に両抵があることを挙げて、陳盛を死刑にするべきではないと判断した^⑤。

以上、比較的古い事案を取り上げた。矜疑として報告される事案には次のような特徴がある。一つは事実認定の問題で、当該事案に確たる証拠・証人がなく擬罪が定まらない場合である。この問題は当然の事ながら古い事案ほど顕著だったと考えられる。また、二点目として、罪情が明らかであっても擬罪がなかなか定まらないこともある。事案三において、当該事案が擅殺か同謀共毆人致死か謀殺人なのかがまず議論となり、その上、そもそも従犯として考えられていた陳盛が、審理過程における首謀者二人の死亡という事態により首謀者に格上げされていく。この点はすなわち解釈の問題である。また、事案二においても擬罪はなかなか定まらない。仮に罪情に誤りがなく強盜得財であったとしても、該犯の分け前は僅かであり、おそらくそのまま律を援引して擬罪することに躊躇いがあった。これが三

点目で量刑の問題である。前述の順治四年の王永吉の上奏の中の「即今頒律以後、復恐拘牽文法附会刻深」とはこれらのことを指すのではないだろうか。確証確拠の不存在や解釈の不確かさ、さらに律例の示す量刑と官員たちが当該事案に対して抱く罪の重さの微妙なズレは互いに影響し合い、擬罪の確実性を失わせる。これらの問題は上級機関の下級機関がなした擬罪に対する駁回の原因となり、また、これらの問題の存在によって自らの擬罪に自信が持てない場合に、上級機関とりわけ督撫はとりあえず当該事案を放置し、判断のより簡単な事案を先に処理していったと考えられる。恤刑の対象となった事案に死罪案件がとりわけ多かったことと考えあわせると、この傾向は慎重な審理が求められる重大事案、すなわち死罪案件ほど顕著であったのではないだろうか。

恤刑官はそれまでの裁判記録をもとに該犯を直接審理し、上記事由が確認できれば、具体的な犯罪・刑罰へと改擬⁽⁴¹⁾し、また死刑執行するべきではないと述べ、あるいは「矜」であるもしくは「疑」であると述べて、何らかの処遇を与えるように訴えた。

恤刑官から報告のあった事案に対して、中央ではいかに判断するのか。すぐに減刑執行を認めるときと認めないときがあり、さらに前者には恤刑官の理由付けを認める場合、恤刑官とは別の理由で減刑執行とする場合⁽⁴²⁾があり、後者には原擬どおりに死刑にするべきであると判断する場合と、判断を保留し巡按御史等に再審理を命じる場合とがある。後者はとりわけ問題となるので事例を挙げる。

【事案四】孟三耀は、孟承玉・孟承慎・孟承禄兄弟が声高に念仏を唱えていたことに起因して彼らと言い争いになり、県に訴え出た。順治八年一〇月一四日に審理があり、孟承慎は責治され、また孟三耀（生員であったためか）に対して服礼をとるよう命じられた。孟承玉兄弟は県での裁きに不満を持ち、一五日になって孟承玉が孟三

耀の当日の外出に乗じて殺害しようと他の兄弟にもちかけ、その夜帰宅する孟三耀を殺害した。

原擬では孟承玉は謀殺人造意律によって斬罪であるが、恤刑官はそれまでの裁判手続でなされた関係者の証言が互いに食い違っていること、確証および凶器がないこと、謀殺人従而不加功として流罪となった兄弟二人が配流途中で（あるいは配流地で）で死亡していることを理由にあげて矜疑であると報告した。しかし九卿会審では、孟承玉等の待ち伏せを目撃する証言や、被害者と同行した証人が孟承玉等の声を聞いたとする証言があり、したがって確証があるといえ、怨みがあつて殺害したことは明らかであり、また兄弟二人が配流地に向け出発した後死亡したとしても、律では「配発事結之後」には抵償を許さないとしているため、いずれも理由にはならないとして、原擬どおりに「斬監候該巡按御史再行親審具奏処決」とするべきであると上奏し、裁可された⁽⁵⁵⁾。

【事案五】一三歳の武大姐は夜観劇の帰りに蘇調燮に空き家に連れ込まれ強姦された。武大姐は叫んだが、死をもつて恐嚇された。

原擬は蘇調燮を強姦幼女として絞罪に擬したが、恤刑官は武大姐が一三歳である点に着目し、幼女とは異なるとして刁姦として杖罪に擬した。九卿会審では一三歳の幼女が殺すと嚇されれば抵抗できるはずもなく、したがって本案は強姦であると判断し、また事件が風化に関する問題であるために罪を減じることができないことを挙げて、原擬どおりの「絞監候巡按御史再行親審具奏処決」とするべきであると上奏し、裁可された⁽⁵⁶⁾。

【事案六】丁国拳が父丁文徳・金榜とともに丁長児を謀殺した。

原擬では丁国拳は斬罪、丁文徳・金榜は流罪に擬していたが、巡撫・道官が何度も駁してきたので結することができなかった。恤刑官は、事件が起こったのは夜のことで目撃者が存在せず、そのため屢々駁され、さらに三人とも冤

を訴えていということから開釈を求めた。三法司は三人とも以前の審理で殺害を認めている事実があり、恤刑官の審録に際して殺害を否定するのは明らかに狡猾に罪を逃れようとしたのだと判断した。ただ事件が謀殺に関するものであるために、巡按御史に命じて審理して真実を究明させるべきであると上奏している⁽³⁷⁾。

【事案七】張福溪の妾楊氏は家の修理費用のことで王破臉に腹を立て、それを聞いた張福溪は表姪の王寅と楊氏とともに王破臉を家に連れ込み梁から吊り下げ暴行を加えたのち、さらに王寅に王破臉の口をこじ開けさせ、楊氏に刀を手渡させて、王破臉の舌を切り落とした。王破臉はその場で死んでしまった。

原擬では謀殺人として、張福溪を原謀として斬罪、王寅を従而加功として絞罪、楊氏を徒罪（収贖）に擬罪したが結していなかった。恤刑官は王寅について、張福溪の命令に従っただけで事前に謀議に加わった等の事情もないことを理由に、威力主使以下手者為従律に改擬しさらに流刑から徒刑に減刑するべきであると判断した。三法司では王破臉を家に連れ込み舌を切り落とすまで王寅も楊氏も張福溪のそばで加功していたのではないか、恤刑官の王寅が加功していないという判断は原招と異なると判断した。ただこの事案でも、謀殺に関することであるために、巡按御史に命じて審理して真実を究明させるべきであると上奏している⁽³⁸⁾。

ただ、恤刑官が確証がなく罪情が不明確であることを理由に減刑を奏請した事案に対し、九卿会審・三法司もまたその見解を容れて減刑を奏請している事案があり、必ずしも真相の究明が求められていたわけではない。

【事案八】鄧明兒等は侯宗孔を糾同して顧道の家に押し入り財物を劫掠し、顧道の義媳を姦し娘や妾を強奪した。原擬では侯宗孔を強盜得財姦汚人妻女として斬罪に擬した。恤刑官は、贓物に関する確據がなく、強奪された女性たちも侯宗孔に言及せず、さらに鄧明兒等七名の夥犯がすでに監斃しており証言が得られないことを理由に矜疑であ

るとして流罪に改擬するべきであると訴えた。三法司は、侯宗孔は確かに鄧明兇等の一味であるが、贓証は不確かで夥犯がすでに監斃しているためその証言を得られないことなどを挙げて、恤刑官の奏請どおり死を免じて杖一百流三千里とするべきであると上奏した⁽⁹⁾。

中央の九卿会審（および三法司の審理）の判断は、すべて皇帝に対する自らの意見の提示となる。恤刑官の判断をそのまま裁可するのではなく、恤刑官からもたらされた報告書をもとに、自ら恤刑官の審理以前の供述・証言などと付き合わせて罪情を確認し、改擬もしくは減刑執行の可否を判断する。したがって恤刑官が確証なしと判断した事案であっても確証ありと判断し、あるいは恤刑官の当該事案を矜疑減刑とする理由付けが律例とは符合しないと判断することもあった。そして、罪情に不明瞭な点があり、他の事情と総合的に考慮して皇帝に対して説得的な意見を提示し得ないと考えた場合に、再審理させ罪情を確定するべきであると上奏したのだらう。

罪情の究明を命じられた巡按御史は恤刑官の判断を支持する場合もあったが、恤刑官の判断を覆す場合もあった⁽¹⁰⁾。中には、恤刑官の矜疑奏請および三法司による減刑相当との判断に皇帝の裁可が下った事案について、やはり情真であり死罪とするべきだと巡按御史が訴え、それによって罪情の確定のために再審理が命じられている事案がある⁽¹¹⁾。

しかしながら、恤刑の機能として、中央の書面のみで行われる審理の欠を補い、また地方の官員たちには期待できない平反を行うことが求められていたことを考え併せると、もちろん全体のうちの一部とはいえ、中央官員の判断によって恤刑官の判断を改め、再審理を地方の官員たちに委ねることは、当初の想定に反しているといえよう。また、地方の官に再審理を命じることは、事案の完結までさらなる時間を要することを意味する。この点も恤刑の利点である未結事案の早期完結という機能を十分に活用していないといえる。恤刑もまた官僚制の中で利用されざるを得な

かったという事情がこれらの問題を惹起した。そしておそらく、中央三法司の官員の間であっても、その間で法的知識の共有、すなわち正確な擬罪をするためには一体いかなる事実を明らかにするべきなのか、また律例の文言をいかに解釈するべきなのかについての認識の共有がなされていなかったということも、大きな影響を与えていたと考えられる。⁽⁸³⁾

四 恤刑手続の中で現れた問題

(一) 地方手続において

恤刑官は、担当地域に到着した（入境）際に、担当地域での審録終了後に、また当該地域を出発する（出境）際に、さらには北京に戻りすべての行程を終了し皇帝に勅諭を返還する際に、それぞれ報告の上奏文を提出しているが、それによれば恤刑は必ずしも順調に進んだとはいえない。前述のように恤刑手続の期限は明代よりも長く定められていた。それにも拘わらず、期限内に終了できない地方も現れた。江西は現地における審録終了の報告の時点で（順治一三年一月二〇日）、⁽⁸⁴⁾江北、湖広・広西は出境の時点で（前者は順治一三年九月一〇日、⁽⁸⁵⁾後者は順治一三年一月四日）、⁽⁸⁶⁾それぞれすでに当初の予定日数を超過している（順治一二年八月二五日を起算点とした場合の終了予定日は、江西および江北は順治一三年六月二五日、湖広・広西は順治一三年九月二五日となる）。

恤刑官たちは期限内での終了の見通しが立たない場合その旨を報告し、期限の延長を求めることができた。例えば山東恤刑官は次のように期間の延長を求めている。

清朝初期における「恤刑」（五年審録）について

ただ、山東省は地方が广大であり、六府属は旧例では一四の区域に区分されている。そこで順に当地に赴き審理するが、ひとつの地区それぞれに二〇日をかけなければ一局を終わらせることはできない。またひとつの府の審理が終わる毎に上奏文および関係資料を作成しなければならず、これにさらに時日が必要となる。案牘は繁多であり、道々奔走し、朝夕拮据して、いま五府の審理が終了した。しかしなお濟南府一府の一三の州県については、ようやく審理がはじまったところである。欽限は間近に迫っており、期限内に事竣の報告をすることができず、期限を過ぎたことによって罪をうけるのではないかと、臣は恐れている。そこで、実に據って上陳し、伏して「皇帝が」睿鑒もて量って「期限を」寛くし施行せんことを請う。

〔但東省、地方遼闊、陸府属旧例分為拾肆案、次第赴彼審理、每一案非貳拾日不能完局、每壹府事完繕疏造冊又需時日、案牘繁多、道路奔走、朝夕拮据、今伍府之事將完、尚有濟南壹府州県參拾處、方在審恤。臣恐欽限嚴迫、限内不能報竣、以致逾期取戾。謹據實上陳。伏請睿鑒量寬施行。〕⁽⁷⁾

この上奏に対して皇帝は「刑部知道」の旨を下し、刑部からの一ヶ月の期限延長の提案を裁可した。⁽⁸⁾ また、江西恤刑官も、審理そのものにかかる時間以外に、関係書類の作成に要する時間、そしてとりわけ所属の府州県が他省に比して多く、さらに省内の移動に時間がかかっていることを理由として期限の延長を求め、三ヶ月の延長が認められている。⁽⁹⁾

また、恤刑手続は、巡按御史の交替やときには恤刑官自身の交替が原因で中断することがあった。

巡按御史の交替は恤刑手続がまさに実施されている最中でもあり得た。恤刑開始の際に、巡按御史がほかに公務のある場合の対応についてはあらかじめ定めていたが、巡按御史がそもそも当該地方に存在しない事態の対応について

は定めていなかったため、恤刑官はこの問題が生じると如何に処置するべきか中央に問い合わせた。例えば江北恤刑官は五月二日に巡按御史が北京に戻ることを聞き、五月一七日に、恤刑手続終了の期限が迫っており新任の巡按御史到着まで審理を行わずに待つことはできないと上奏した。^⑩覆奏を命じられた刑部は「江南恤刑官劉世傑の例と同じく、恤刑官に有司を会同して速やかに審理し上奏させるべきである」と上奏し、閏五月三〇日に「依議」と旨が下った。江北恤刑官のもとに命が届いたのは六月二三日のことであり、この間審録は中断している。この問題は複数の地方で生じたと考えられる。

恤刑官自身が手続中断の原因となるのは、派遣先で病に倒れ、さらには死亡した場合や、あるいは革職によって呼び戻される場合などであった。史料によると、河南では一人目が病に倒れた後、二人目が到着したが審録を始める前に死亡した。そこで新たに任命された三人目の恤刑官は順治一三年一〇月二五日に北京を発ち、順治一三年十一月一日に入境している。^⑪また、陝西・四川の場合には、一人目が京察によって革職され、二人目は任命されたが到着の前に革職となった。三人目の恤刑官は順治一三年二月一日に皇帝からの勅諭を奉じ、順治一四年一月二九日になってようやく入境している。^⑫

当該恤刑官による恤刑継続が不可能となると、新たな恤刑官派遣の応否が議論された。次に挙げる史料は、二人目の河南恤刑官が死亡したとの報告が北京にもたらされた後に、恤刑官の派遣をどうするべきかについてなされた議論である。

臣等は次のように考える。以前、山東恤刑官の劉允燦を臣部等が上奏して弾劾した際に、未だに審録の終わっていない恤刑すべき案件に関しては当該地方の巡按御史が審理して上奏せよとの旨を奉じた。つつしんでこれに遵

い、この件に関する書類がある。調べたところ、山東の恤刑案件においては、恤刑官は五府の審録を終えており、審録を終えていないのは一府のみであった。いま河南において審録を終えているのはただ二府のみで、まだ六府については審録が終わっていない。そこで恤刑官を遣わし審録を引き継がせるべきである。

〔臣等查得。前山東恤刑官劉允燦、臣部題參、奉有未完恤案著該巡按御史審奏之旨、欽遵在案。查山東恤案、恤刑官審完伍府未完止壹府。今河南審完止貳府、尚有陸府未經審完、相応遣官接代審録。〕⁽⁷⁴⁾

この史料によると山東恤刑官は前述の期限延長の奏請の後革職され、まだ審録が終わっていない濟南府については巡按御史にその審録が命じられた。他方で河南の場合には、未審録の府が六つと多いため、新たに恤刑官を派遣して審録させるべきであると判断されている。その他浙江でも恤刑官が病故しているが、刑部は浙江への新たな恤刑官の派遣をめぐって、

該本部は次のように考える。浙江省では恤刑で審録し終えたのは七府であり、審録を終えていないのは四府である。しかしながら浙江省はその道のりがはるか遠い。以前、山東恤刑官が事を犯した際に、審録していない事件については当該巡撫・巡按御史にその審録を引き継がせた。そこで今回もこの例に照らして当該巡撫・巡按御史に勅を下して審録させることを請う。四ヶ月の期限を定めて具奏させ、そして核覆のよりどころとするべきである。

〔該本部查得。浙省審完柒府尚有未審肆府、而浙省道路遙遠。前山東恤刑官犯事、未審事件交該撫按審録、今應照此例請勅該撫按審録、定限肆個月具奏、以憑核覆可也。〕⁽⁷⁵⁾

と述べている。刑部がこの見解を上奏したのがすでに順治一四年六月一二日のことであり、恤刑の開始からすでに二

年近く経過していたため、この上更に新たな官僚の派遣によって時間をとられたくなかったであろう。審録すべき事案の量、あるいは当該地方までの距離を考えて新たな恤刑官の派遣を取りやめるのは確かに合理的であろうが、しかしながら、恤刑手続本来の趣旨から外れてしまっていると言わざるを得ない。

(二) 中央への負担

恤刑の事案処理は、北京の諸衙門にも大きな負担と混乱をもたらした。すなわち、中央に送られてくるのは上述のように、事実関係にあいまいな点がある、解釈が分かれる、さらに量刑に問題があるなど、判断の難しい事案が多い。かかる事案はその処理に常以上の時間を必要とした。例えば、「この案件は招詞が繁雑で、かならず詳細に検討して案を定めなければならないが、期限内に完結するのは難しい〔此案招詞繁冗、必須詳閱定案、限内難以完結〕」と述べている刑部の上奏が存在する。⁽¹⁷⁾

また、九卿会審の開催が三法司の審理へと改められた背景には、三法司以外の衙門の負担軽減および手続の合理化があった。地方から恤刑矜疑・改擬事案が報告されはじめてしばらく経った頃と考えられる順治一三年五月一日に、都察院の貴州道監察御史侯于唐が九卿会審をやめて、かわりに三法司の会議にすべきであるという上奏文を提出した。⁽¹⁸⁾

直省に恤刑をこれ派遣したのは、人命を慎重にするためであり、その期待は無冤にあり、これは皇上の好生の美德である。矜疑減等として上奏されてくる事案について、さらに九卿詹事科道等官に会議させるのは、情法の中

を酌議するためであり、これもまた皇上の平允の至意である。しかしながら臣がくりかえし思うには、九卿等の會議を挙行するのは庶務において障碍こそあれ、刑名において助けとはならない。むしろ、三法司に專責して、要にして煩雜でもないほうがよいのではないだろうか。

〔直省恤刑之遺、慎重人命、期在無冤。此皇上好生美德也。其矜疑減等奏報諸案、仍令九卿詹事科道等官會議、以酌情法之中。此又皇上平允至意也。然臣反覆思惟、會議之舉、甚□礙於衆務、亦無補於刑名。不若專責法司要而不煩。〕

恤刑事案について九卿會審を行うのは刑獄を行う際に慎重であるのを求める所以ではあるけれども、実際には各衙門の事務処理において障碍となりこそすれ、審理においては助けとなっていない、三法司の專責にすべきである。侯于唐はこのように主張し、その理由として次のように述べる。

會典によれば、そこには恤刑の事宜について「凡そ□□の改駁の件数についてはすべて本部の堂上官がこれを調べる」とある。これは□□であること明らかである。あるいはその失出を憂えるのであれば、それは都察院がこれを主管し、失入を憂えるのであれば、それは大理寺がこれを主管するのであるから、これは三法司の職掌であること明らかである。もし議論をして裁決するならば、官は多くないわけにはいかず、また知識は広くないわけにはいかない。かつ各省の招審の掲帖はただ三法司にのみ送られ、三法司ではその事件の委細を詳看することができるが、各衙門は細検することができない。もしその場ですぐに掲帖をみて「判断するのであれば」恐らくおろそかにも間違いをしでかすであらうし、もし結局掲帖をみずにいればすなわち懸断をするであらう。舌端耳畔でそばから話のさわりを聞いたとしても、顛末を知らず、臆測で議論するのでないならば、何かを言ったとし

ても賛同を得ることはできずに、衆に随つて画題するほかない。

〔按会典開載恤刑事宜、凡□□□改駁件数、俱本部堂上官查核、是為□□□明□。或虞其失出、則都憲主之、或虞其失□、則廷尉主之。是為三法司職掌明矣。即以議論裁決、官不可為不衆、識不可為不広也。且各省招審揭帖独送法司詳看其事件委曲、各衙門未經細檢。若当下看揭恐失疎忽、若竟不看揭焉能懸斷。至有舌端耳畔旁聞緒論、不知顛末、非憑臆爭執、則一詞莫贊、隨衆画題。〕

恤刑はそもそも三法司の主導で行われる。たとえ九卿会審を開き多くの高官で審理を加えたとしても、三法司の官僚であれば恤刑官から送られてきた資料に事前に目を通しておくことができるが、三法司以外の官僚は会審の場ではじめて当該事案を目にするため、にわかに妥当な判断をすることができずに、単にその会審に出席して時間を浪費するのみである。以上のように侯于唐は説いた。

この提議に対する議奏を命じられた刑部は、二三日に次のように上奏している。

各省の恤刑は旧制では三法司が會議することになっていたが、近く九卿詹事科道等官が會議せよとの旨を奉じた。誠に皇上の刑獄を慎重にする至意である。ただし、衙門にはそれぞれに職掌があり、會議があるたびに、各衙門の政務は必ずその多くがゆるがせになっている。そのため、あるいは一つ二つの衙門は緊急の公事を滞らせることになってしまい、この日にすべてが集まるのができずに、會議することができなくなり、ただちに中止を告げることとなる。故に監察御史は旧典に照らして恤刑の責任を三法司に帰すべきであると奏請したのである。

まさに監察御史の提言の如く、さきに旨を奉じて九卿詹事科道等官が會議すべきであった事件及び今後のおよそ恤刑事件に関しては、三法司に勅を下して、刑部の司属、都察院の御史、大理寺の評事等官がともに参加

してつまびらかに審議して妥当な判断をさせるように奏請する。臣等が会同して確議して具覆すればよいだろう。
〔各省恤刑旧制三法司會議、近奉有九卿詹事科道等官會議之旨。誠皇上慎重刑獄至意。但衙門各有職掌、每遇會議、而各衙門政務廢弛必多。然或一二衙門稽○緊急公事、是日不得齊集、不便會議、当即伝散。故道臣有照旧典歸法司之請。相応○議前奉旨九卿詹事科道等官會議事件及○刑事件、応請勅下三法司、臣部司属・都察院御史・大理寺○等官、互參詳妥、臣等会同確議具覆可也。〕

刑部は、各衙門の事務処理の停滯のみならず、九卿詹事科道等官で會議する場合には参加すべき衙門・官僚が多いため齊集がままならない場合があり、ひいては會議自体を実施することができないとして、重大事案を除いて、三法司のみで審議すべきであると答申した。この刑部上奏には「いま、各衙門にはそれぞれ公事があつて齊集できない、とするなんじら刑部の覆称を受け取った。今後はなお三法司に命じて詳細核擬具奏させ、もし重大な事情がありまことに會議すべき場合には、なお旨を請い実施せよ〔今據尔部覆称各衙門俱有公事不得齊集。以後仍著三法司詳細核擬具奏、如有重大事情応會議者、仍請旨行〕との旨が下った。

中央での審理を明朝のように三法司の會議ではなく九卿会審とした背景として、慎重審理が強調されるが、そのほかに、恐らく恤刑を寛典として大々的に実施するという意気込みがあったのではないだろうか。⁽⁹⁾しかしながら、中央の各衙門には、十分な資料やそれを検討する時間を審理の前に与えられることはなかった。また地方からの矜疑・改擬の奏請は不定期的にもたらされ、それに応じて会審も不定期的な開催であつたと考えられる。すなわち、中央の各衙門においては、通常の公務に加えて、かかる問題を抱える会審に参加しなければならず、強いられた負担は相当のものであつたことが推測される。⁽¹⁰⁾

五 恤刑の廃止と他の審録手続

順治一二年から五年後、順治一七年が恤刑実施の年とされ、恤刑官が各地方へと出發した。その後、十一月六日に恤刑の実施の停止が決定され、恤刑官は呼び戻されることになった。

戸科給事中胡悉寧が次のように奏請した。近く現に監候している各犯を概して減等に従わせるという上諭を奉じた。薄海内外は皆恩恤を蒙る。さて恤刑に官員を派遣したが、部に勅して恤刑官を呼び戻し、それによって恩は皇上より出るものであることを知らしめるべきである。かつ、恤刑官を呼び戻せば地方の繁費を省くこともできよう。以上を記した上奏文を提出したところ、次のような旨を得た。奏するところは是である。およそ待決の重犯は概して減等を行うことにはすでに諭旨がある。恤刑の各官については呼び戻す。

〔戸科給事中胡悉寧奏言。近奉有見在監候各犯概從減等之上諭。薄海内外皆蒙恩恤。其恤刑一差、不若勅部撤回、以見恩自上出。且省地方繁費、疏入。得旨、所奏是。凡待決重犯概行減等已有諭旨。其恤刑各官、著撤回。〕

この決定の五日前の十一月一日に、朝審招冊を閲覽していた皇帝は、その人犯の多さに「概して正法を行うのは心において忍びない」と考え、監候人犯の減刑執行を命じた。^⑧この恩赦が減刑執行の対象とするのはすでに皇帝から「秋後処決」の旨を奉じている罪囚と考えられ、恤刑の対象となる罪囚のごく一部である。ただ、一方で監候人犯を減刑執行し、他方で恤刑手続によって減刑執行すれば、混乱を招きかねない。とりわけ地方での手続が煩雑になる。以上の理由から、順治一七年の恤刑は中止となった。

もちろん、この中止は一回限りの臨時の措置であつた。しかしながら、その後の恤刑官派遣を示す史料は存在せず、むしろ康熙八年には五年審録の廃止に言及する決定が出されている。

上は次のように命じた。直省の罪囚について、以前は恤刑官を遣わし審録させたが、今、恤刑に遣わすことは罷めた。熱審の時になって、実犯死罪ではない人犯がいたならば、宜しく具題して減等させるべきこと、在京の法司の例の如くせよ。刑部に命じて直隸各省に通行させ、永に令とさせる。

〔上以直省罪囚、旧遣恤刑官審録、今恤刑罷遣、遇熱審時、有非実犯死罪者、宜具題減等、如在京法司例。命刑部通行直隸各省、永著為令。〕⁽⁸⁴⁾

「熱審」とは、監獄に収監されている罪囚を熱暑の時期に減刑する手続であり、清朝は明朝から継承し実施している。⁽⁸⁵⁾『大清会典』によれば、順治八年に在京の獄囚を対象に、笞杖徒流は機械的に減等、死罪で可矜疑であれば奏請定奪した。順治一〇年には熱審の対象を地方監獄の獄囚にまで広げた。その後、熱審は順治一八年以降停止されていたが、康熙七年に復活し、そして康熙八年にこの決定がだされた。⁽⁸⁶⁾恤刑は、皇帝の恩恵の名の下に、官の立場から見れば監獄から新旧の罪犯を放出し、他方で獄囚の立場から見れば刑罰を減免される機会である。恤刑が廃止されれば両者ともその機会を失う。そこで恤刑に代わってかかる機会を与えるための措置として、実施の理由付けは恤刑とは異なるとはいえ、同様に皇帝の恩恵の名によって罪囚を減刑執行する熱審が注目されたのだろう。

しかしながら、このとき熱審を通じて減刑執行することが認められたのは真犯死罪以外の罪囚である。死罪事案には恤刑に代わる恩恵は施されないのだろうか。

恤刑が死罪事案にもたらず効果として最も着目するべきは、何よりも滞獄の解消であろう。北京の三法司や皇帝が

地方で発生した死罪事案を把握し、適正な処理をすることで、冤罪は解決し、あるいは妥当な量刑判断による刑罰の執行が可能となる。その中で減刑の措置が取られることもあるというだけのことである。⁽⁴⁷⁾すなわち、この側面においては地方から北京へと事案が報告されさえすれば基本的に問題はない。ただ、恤刑の効果として、もう一つ、獄囚の中にいるいはいるかもしれない矜疑の者をすくい上げるために慎重に審理を加えるという側面もある。おそらくこの側面に関しては、当時整備され始めた秋審手続がその役目を恤刑のかわりに担ったのではないだろうか。そもそも地方の秋審は、明朝において死刑を執行する際に官を派遣したところに淵源があり、さらに死罪囚を情真と矜疑とに分ける。すなわちもともと秋審と恤刑とは根本的な部分で酷似した手続であった。そして、清朝においては、恤刑の実施に際して秋後処決が停止され、⁽⁴⁸⁾また、順治一七年に恤刑が途中で中止されたのも、秋後処決を待つ監候人犯の減刑執行が契機となるなど、官僚・皇帝が恤刑手続と秋審手続を関連づけていた様子がうかがえる。熱審が流刑以下の人犯を対象に矜恤を与え減刑執行する場を提供するのであれば、秋審が死罪人犯に矜恤を与え慎重に審理する場を提供するのだと見做されたのではないだろうか。

恤刑と熱審そして秋審は、いずれも皇帝の仁徳にもとづき、罪囚を審理して減刑執行する、あるいは冤罪のないように慎重な審理を行う、さらには滞獄を解消するという役割を担っていた手続である。そしてそれぞれの対象となった罪囚は少しずつ重複する。明朝でこれらが実際にどのように運用されていたのか不明瞭な点があるが、少なくとも清朝ではそれぞれを整理し統合していった。

おわりに

清朝は、理念的・政治的な効果や、滞獄問題の解消、冤罪発生防止などの効果を期待して恤刑を導入した。しかし実際に運用してみると、古い事案に決着がつけられるなど期待どおりの効果が發揮されたものの、その一方で種々の問題が表面化し、予想以上の負担と混乱を地方のみならず中央にももたらした。十数年のなかで処理されてこなかった事案を一息に片付けようというのだから、当然ではある。この多大な負担と混乱もまた清朝がその後恤刑実施に積極的になれなかった大きな要因であると筆者は考えている。

ただ恤刑を実施することで滞獄の解消など様々な効果が得られたこともまた事実である。ではそれらの効果を恤刑を廃止した清朝は一体どこに求めたのか。一つには熱審や秋審など、他の審録手続がそれを担ったことが指摘できる。そして、とりわけ滞獄の問題に関連しては、清朝は当初から恤刑にのみたよるのではなく、日常の事案処理の中で解消しようとしていた。恤刑を実施して負担がはつきりすると、その傾向がより顕著になったのではないか。すなわち恤刑を何度繰り返したところで所詮はその場凌ぎに過ぎず、根本的な解決とはならない。むしろ事案をためないような方向で改善を加えた方がより合理的である。事案処理遅延には処分を以てあたれば、官僚たちに事案処理の期限厳守をうながすことができる。清朝はこのように考え、枠組を整えていったように思われる。

そこで想起されるのは考成法である。考成法は、案件毎に処理期限を定め、達成の正否によって賞罰を与えることで、官僚たちに対して速やかな案件処理を促すというシステムで、明代の張居正の主導による導入以来、途中空文化

の時期はありながらも、清朝に受け継がれた。清朝ではさらに『処分則例』などを作成し、賞罰規定の体系化を進めたことは、先行研究がすでに述べてきている⁽⁹⁾。先行研究において考成法研究の対象としてとりわけ取り上げられているのは徴税に関する側面であるが、司法案件の処理における考成の適用拡大も若干ながら指摘されている⁽¹⁰⁾。

また、速やかな事案処理には法的知識および裁判を行う者たちの間でその共有が根本的に必要となる。すなわち、当該事案を見ていかなる要件を抽出するのか、またそれをどのように律例に当てはめていくのか、さらにはそれをするように上申文書に書けば上司の裁可を得やすいのか等の点において、共通の認識があれば事案処理もそれだけ速くなる。清朝においてはこの点も徐々に整えられ、様々な律例の私註本や成案集が刊行され、法的知識が共有されていく。

もちろん、清朝における刑事的案件処理の期限の整備の問題や熟審の展開など、解明しなければならない問題は残されている。恤刑や清朝初期の司法手続に関しては、これらの点を整理した上で、再度考察を加えなければならない。

1 以下、中国の裁判制度に関しては滋賀秀三『清代中国の法と裁判』（創文社、一九八四）。

2 そのため事案は完結するまでに、事案の重さに応じて何段階かの審理をうけることになる。註1前掲書のなかで滋賀秀三氏はこれを「必要的覆審制」と名付けている。

3 註1前掲滋賀書。また唐代の監察制度を扱った論考として、島善高「唐代慮囚考」（瀧川博士米寿記念会編『律令制の諸問題——瀧川政次郎博士米寿記念論集』、汲古書院、一九八四）がある。

4 万曆『大明会典』卷一七七、「恤刑」。

- 5 康熙『大清会典』卷一三〇、「恤刑」。
- 6 万曆『大明会典』卷一七七、「恤刑」。
- 7 谷井陽子「明代裁判機構の内部統制」(梅原郁編『前近代中国の刑罰』、京都大学人文科学研究所、一九九六)。その他、尤韶華『明代司法初考』(廈門大学出版社、一九九八)は、明代の司法手続を概述している。
- 8 陶安あんど「明代の審録——罪名例の伝統に見る朝審と秋審制度——」(『法制史研究』五〇号、二〇〇二)は、明代において審録手続が分化していくと述べている。
- 9 雍正『大清会典』卷一九四、「恤刑」。
- 10 乾隆『大清会典』。なお、「欽恤」という項目があるが、恤刑への言及はない。
- 11 嘉慶『大清会典』卷四三、「凡恤刑之典」、および光緒『大清会典』卷五六、「凡恤刑之典」。乾隆『会典』の「欽恤」の項目に由来すると考えられる。なお『清国行政法』は嘉慶『会典』の記述から、「恤刑トハ刑罰ノ執行ヲ停止シ又ハ刑罰ヲ軽減シ若クハ免除スルモノニシテ皆国家ノ特典ニ出ツ」(第五卷一九〇頁)と述べ、恤刑を様々な手続をその中を含むものとして説明を加えている。
- 12 清律の編纂過程を示した研究として、谷井俊仁「清律」(滋賀秀三編『中国法制史——基本史料の研究——』、東京大学出版会、一九九三)、清朝における朝審・秋審の導入を扱った研究として、拙稿「可矜と可疑——清朝初期の朝審手続及び事案の分類をめぐって——」(『法制史研究』五四号、二〇〇五)、「緩決」の成立——清朝初期における監候死罪案件処理の変容——(東京大学『東洋文化研究所紀要』一四七冊、二〇〇五)。
- 13 康熙『大清会典』卷一三〇、「恤刑」。
- 14 第一歴史檔案館内閣題本北大移交順治朝刑罰類(以下「北大移交」)二〇、順治四年一〇月四日、刑部尚書吳達海等。この史料は王永吉等の奏請に対する刑部の覆奏である。この他、『世祖章皇帝実録』卷三四、順治四年十月辛未条(一〇月四日)およ

び、『清史稿』卷一四四に王永吉の奏請によって恤刑実施を決定したとする記述がある。

15 『清史列伝』卷七八、李化熙伝。

16 中央研究院内閣大庫檔案（以下「内閣大庫」）八七一四〇、順治十一年一月七日、刑部郎中劉芳聲、「臣奉命審決畿北、據各府解到重囚全冊、京詳在案者止有伍起、餘係督撫按批行候決、順・永・保・河肆府共計不下貳參百起。…問刑各衙門、凡遇擬定重案、設立限期通行京詳、儻有沈閣不奏者、許臣部查違限遠近、直行參究。」また劉芳聲は滯獄の原因として、「査全招係順治元貳參年者極多。彼時当初創事鮮□、□州県印官或係代庖、或係委署、以故招詞中游移參錯、情罪多有未協。」と述べている。

17 註16前掲史料内閣大庫八七一四〇。また、この論旨が引用される上奏文によると、旨が下ったのは順治十一年一月一〇日であった（『明清檔案』A二〇一五八、順治十一年七月七日、江寧巡撫周國左）。

18 例えば、註17前掲史料『明清檔案』A二〇一五八、同A二〇一六一、順治十一年七月一〇日、河南巡撫亢得時。

19 『明清檔案』A一八一〇五、順治十一年一月一四日、刑科給事中陳忠靖、貼黃。陳忠靖は「臣辦事垣中、見刑部湖廣司郎中劉芳聲有蘇理沈獄一疏、奉旨著督撫及問刑衙門將一応未結文卷作速審明。仰見皇上好生至德、雖解網泣罪□□過也」と述べており、本上奏が劉芳聲の奏請およびそれに対する皇帝の裁可をうけて提出されたことが分かる。

20 註16前掲史料内閣大庫八七一四〇の劉芳聲の上奏は「為蘇理沈獄以広皇仁事」をタイトルに持つので、それをふまえたと考えられる。

21 順治十一年四月一四日には、恤刑実施を前提にして恤刑官の選定基準・審理方針について述べる上奏が提出されていることから（『世祖章皇帝実録』卷八三、順治十一年四月癸酉条、および『明清檔案』A一九一八九、礼科右給事中王廷諫、決定はこれより前であったと考えられる）。

22 『世祖章皇帝実録』卷八三、順治十一年五月丁未条（五月一八日）、「遣刑部郎中劉玉佩往直隸、劉世傑往江南・蕭家芝往浙江・吳顥往四川・王度往湖廣・竺重光往陝西・霍炳往河南・劉芳聲往廣東・孫允裕往山西・楊兆魯往山東・大理寺左寺正桑芸往福

清朝初期における「恤刑」（五年審録）について

建・右寺正甯承勲往江西、恤刑。」

- 23 『明清檔案』A一九一〇七、順治二年四月二十九日、都察院左都御史王永吉。本文に取り上げたのは奏請のうちの第三款である。この他、第一款では恤刑官の選定法について、在任期間の長短に基づき選ぶのではなく、才能も人品も兼ね備えた人物を幾人か選び出してその中からくじ引きで選ぶべきだとする。第二款では巡撫との関係が述べられ、巡撫は自ら裁可した事案を覆すことはしないだろうから、恤刑官が独力で可矜・可疑を判断して上奏し、また巡撫に矜疑の事由を伝える。巡撫はただその文書の保管だけするべきだとする。第四款では、今回の恤刑手続の後五年は恤刑を行わないのだから、現に審理中でまだ完結していない事案を隱匿・遺漏することなく今回の手続で処理しなければならないとする。第五款では、土賊や叛党に關しては、地方の官が捏造や誣告によって該犯を捉えている場合があり、しかも累の及ぶ範圍が広いため、とりわけ注意が必要であることを述べる。

- 24 内閣大庫一一八一七八、大学士范文程等（日付不明）。なお、この上奏提出の時期について、『清史稿』は特に明示していないが（卷三三二、范文程伝）、『清史列伝』は順治二年八月としており（卷五、范文程伝）、さらに『世祖章皇帝実録』は八月三日の条にこの上奏を挙げ「從之」としている（卷八五、順治二年八月庚申条）。

- 25 谷井陽子氏によれば、明代の審録に際しても、地方への負担が大きな問題として認識されていた。註7前掲谷井論文。

- 26 順治二年一月二八日に刑部員外郎呂愼多は恤刑実施を奏請する中で「去年因水旱之後、荒殘堪憫、恐致煩擾、差而暫止。臣以為行此大典、則和氣充盈、災殄潛消、可無復虞水旱也。」と述べ、また刑部郎中王度は一月二十四日に「乃當鼎革後、刑獄繁濫、致干天和。恤刑大典、奉旨貽貳年奉行。因臣同官劉芳聲以畿輔沈獄參百餘起入告、部覆兪允即行。會逢災傷見告、奉旨暫停仍勅督撫速完滯獄。伏思、直省刑名各有經管猶□官按視者、一恐省員諸務業雜、一恐省員偏執成案。故而官面訊早結。」と述べている。いずれも、『明清檔案』A二三一九九、順治二年七月二二日、刑部尚書圖海等（呂愼多および王度の奏請に対する刑部の議奏）に引用される。なお、王度は、恤刑官の派遣が地方や民衆に大きな負担をとまうことを理由として派遣を取り

やめるといふ論調に対して、随行の胥吏の人数を抑えれば地方への負担が抑えられる、との見解を示している。

27 『世祖章皇帝実録』巻九二、順治二年七月壬辰条（七月一〇日）。

28 『明清檔案』A二三—一〇二、順治二年七月二三日、広東道監察御史焦毓瑞。この史料は、恤刑官の選定の際に選定の要件に反して不公平にも同郷の官員を定めたとして、刑部尚書劉昌を弾劾した上奏文である。

29 勅稿は、現時点で、内閣大庫一六六四九四（日付不明）、『明清檔案』A二三—一九四、順治二年七月一九日の二本が確認できる。内容から判断すると、前者が先に作成されたと考えられる。また、前者には推敲の後も見られ興味深い。勅諭は、山西（内閣大庫一〇三九八五）、山東（同一〇三九七四）、陝西及び四川（同一〇八三四七）、河南（同一〇八三三一）の恤刑に関するものが残存している。

30 混乱を避けるために順治二年には監候秋審人犯の処決を停止する措置が取られたが、当初京師の朝審人犯はその対象に含まれていなかった（註12前掲拙稿「『緩決』の成立」）。このことも、順治二年の恤刑が地方のみを対象にしていたことを示している。

31 万曆『大明会典』卷一七七、「恤刑」。

32 註26前掲史料『明清檔案』A二三—一九九。

33 北大移交二三〇五、順治一三年五月一六日、刑部尚書國海等には、「直省恤刑大理寺等衙門左寺正臣柯士芳等奏前事、奉有刑部速議具奏之旨。刑部覆議、照旧会典開載、若御史別有公務、督同所在有司審錄、仍移文会同巡按御史可也、等因具題、奉旨依議行、欽此。」とある。なおこの規定は、時期が早い勅稿では勅諭の中に含まれていたが（註29前掲史料内閣大庫一六六四九四）、実際の勅諭では削られている。

34 『歴代職官表』によれば、順治一二・一三年当時の郎中および員外郎の官位は、滿州郎中は三品、蒙古・漢軍・漢人郎中は正五品、滿州員外郎は四品、蒙古・漢軍・漢人の員外郎は従五品であった。大理寺寺正（後に寺丞に改称）は、当時滿州・漢軍

清朝初期における「恤刑」（五年審録）について

寺正は四品、漢人寺正は正六品であった。他方、知府は正四品、知州は從五品、知県は正七品であった。

- 35 順治四年に恤刑実施が検討された際にすでにかかる懸念が指摘されている（『世祖章皇帝実録』卷三四、順治四年一〇月乙酉条（一〇月一八日）。順治一年になされた王永吉の条奏の第二・三款もまた、同様の懸念のもとに述べられている（註23前掲史料『明清檔案』A一九一—一〇七）。

- 36 康熙『大清会典』卷一三〇、「恤刑」。

- 37 内閣大庫八八〇〇〇、順治一三年五月一七日、刑部郎中王度（江北恤刑官）。

- 38 万曆『大明会典』卷一七七、「恤刑」。

- 39 福建の審録に赴いた恤刑官が福建に到着したことを報告する『明清檔案』A二五一—一〇、順治一三年一月二七日、刑部郎中吳顥には、「職本非材、謬膺欽恤之命、差往福建審録。職凜奉勅諭、於順治拾貳年捌月貳拾伍日陛辭、即星馳就道、已於拾貳月拾伍日至浦城縣受事。」とある。また江北の審録を担当した恤刑官がすべての作業を終え北京に戻り、勅諭返上の際に提出した上奏文である内閣大庫八九四五七、順治一三年一月四日、刑部郎中王度には「臣於順治拾貳年捌月貳拾伍日欽奉勅諭、前往江北審録。今昭事竣、所有原領勅諭壹道理合進繳。為此具本親齎、謹具奏聞。」とある。

- 40 北大移交一四一七、順治一三年九月一日、刑部尚書図海等。この史料自体は、恤刑官が可矜と申し述べてきた罪囚に対する三法司の審理結果の上奏文である。

- 41 例えば、『明清檔案』A二七一—五一、順治一三年五月、刑部員外郎方亨咸（湖広・広西恤刑官）には、「行據湖広衡州府經歷司及所屬桂陽州并衡陽等県、永州府經歷司及所屬道州并零陵等県、寶慶府經歷司及所屬邵陽等県、郴州及所屬永興等県、各將見監一応輕重罪囚・連原行文卷・干審人証、解送到職。照得巡按湖南監察御史胡來相別有公務、相離地遠、職謹督同衡州府知府范明宗・理刑推官楊于先・及所屬桂陽州知州劉見龍・衡陽等県知県王名世等、永州府知府黃中通・理刑推官趙裔昌・及所屬道州知州高攀龍・零陵等県知県劉方至等、寶慶府知府張惟養・理刑推官朱応昇・及所屬邵陽等県知県王在璣等、郴州知州鄧源

瀧・及所属永興等県知県周渾等、逐一従公審録。」とある。

- 42 北大移交一二九五、順治一三年五月六日、刑部郎中蕭家芝（山西恤刑官）。この史料は山西における審録の終了に際して提出された報告書であり、矜疑・減刑の罪犯の名も記されている。

- 43 註12前掲拙稿「『緩決』の成立」。

- 44 註61後掲事案。

- 45 『明清檔案』A二六一、順治一三年二月三日、直隸巡撫董天機。九卿会審では審理した中に古い事案があった場合、例えば「査案内有元年者、有陸柒年者、該督撫按未經題結、応請勅下吏部査議可也。」（註33前掲史料北大移交一二三〇五）と奏請しており、皇帝の下命はこれに応えたものと思われる。

- 46 註45前掲史料『明清檔案』A二六一によると、刑部の提案によって督撫に長年末結であることが問題となった事案に関与してきた歴年の官員の職名を報告させることになった。直隸巡撫董天機は、歴年の督撫按が会審して上奏したか否かについては分からない、自分が着任してからは処理の遅れはなく、今回処理の遅れが指摘された事案についても、すでに結案して上奏しようとしていたところに恤刑が決定したので、上奏を見合わせていた、当該事案の処理に関わった歴年の官員のリストを作成し提出すると述べている。

- 47 例えば、内閣大庫一一九八九六、順治一三年一〇月三日、刑部尚書図海等、「査案内有元貳年者、有参肆年者、其遅報各官、応送吏部議処。査係順治拾参年柒月恩詔以前、応免議。」

- 48 註33前掲史料北大移交一二三〇五。

- 49 『明清檔案』A二八一七四、順治一三年八月八日、刑部郎中王度（江北恤刑官）。

- 50 『明清檔案』A三二一二七、順治一五年二月、浙江巡按御史王元曦。

- 51 例えば、『明清檔案』A二七一一四七、順治一三年五月二九日、刑部郎中侯方夏（浙江恤刑官）に報告のある汪三八は確証確供

清朝初期における「恤刑」（五年審録）について

のないことを理由として強盜已行得財（斬罪）から強盜已行而不得財（流罪）に改擬され、また同じく厲天甲は殺害の意思はなく被害者が倒れたところ打ち所が悪かったと判断され鬪毆殺人（絞罪）から過失殺傷人（絞罪であるが取贖）に改擬されている。

52 例えば事案一の孔自恩について、「ただ原招を調べると、審洞から堕ちて生命を損なったのであり、すべてが毆ったことによるとは限らない。」として杖一百流三千里に減刑している。

53 その多くは、事件が順治八・一一・一三年の恩赦以前に発生しており、援赦が可能であるという理由付けであった。例えば、『明清檔案』A三〇一五六、順治一四年一月、浙江巡按御史王元曦に記載される梅春拱の事案（故殺、真犯人が自白）、同A三〇一五七、順治一四年一月、浙江巡按御史王元曦に記載される林球の事案（共毆人致死、首謀者が監斃）、世裘の事案（鬪毆殺人、凶器未発見）、蔣德之の事案（謀殺人、被害者の怪我が治癒したため謀殺人已行而不傷人に改擬）などがある。

54 適用が検討されているのは鬪毆及故殺人律中の共毆人致死を対象とした条例であり、謀殺人にあたる本事案にはたして適用できるのかといった問題が、すでに存在している。

55 『明清檔案』A二九一六三、順治一三年一〇月、山西巡按御史高爾位。この史料は再審具奏を命じられた巡按御史の報告文書である。巡按御史は、被害者と同行した証人の言は疑いのないものであり、「一斬難寛」と述べている。

56 『明清檔案』A三〇一二六、順治一三年一二月、順天巡按御史胡秉忠。この史料は再審具奏を命じられた巡按御史の報告文書である。巡按御史は武大姐が強姦されたことは血の付いた衣からも明らかであるとして、「律絞非枉」と述べている。

57 『明清檔案』A二九一〇一、順治一三年一月二七日、刑部尚書図海等。

58 『明清檔案』A三一一一四、順治一四年一月、江寧巡按御史劉宗韓。この史料は再審理後に巡按御史から提出された報告文書である。再審理を経て、王寅・楊氏は確かに張福溪が王破險の舌を切り落とす手助けをしているものの、その他に助殴して重傷を負わせたという様子はなく、そうである以上は加功と判断することはできないとの見解が示されている。

59 註57前掲史料『明清檔案』A二九—一〇一。

60 註58参照。また、『明清檔案』A三二—一八〇、順治一五年五月、浙江巡按御史王元曦にある陳三十六の事案では、それまで強盜得財とされていた陳三十六について、恤刑官が不得財としたため、前後で異なる罪情認定であるとの三法司の指摘に基づき、巡按御史の再審理が命じられた。巡按御史は従前に得財と判断した理由を説明し、その上でなお不得財との見解を示している。

61 『明清檔案』A三二—一七六、順治一五年五月一日、陝西巡撫陳極新にある馬騾子の事案では、堂弟を謀殺したとして死罪に問われ、すでに監候再審の旨を奉じて巡按御史が再審理の上情真であり秋後処決すべきであると上奏している該犯について、恤刑官は確証の據がないと述べて矜疑に列入して報告した。三法司は前後の招情が大きく異なっているため、巡撫・巡按御史に再審具奏させるべきであると上奏し、皇帝に裁可された。巡撫は再審理後のこの上奏文の中で、傷痕と一致する凶器も発見されており、また目撃証言もあると述べて、恤刑官の見解が誤っていると主張した。

62 『明清檔案』A三四—一二六、順治一六年閏三月二〇日、陝西巡撫陳極新にある王守強の事案で、原擬では謀殺人加功とされた該犯について、恤刑官は証人が該犯の加功の情節を見ていないと供述したことから矜すべきであると報告した。三法司は該犯を謀殺人不加功として流刑に減刑の上、援赦免罪とするべきと上奏して、皇帝の裁可を得た。ところが巡按御史は、再審理を加えたところ該犯が加功したことは情真であり、やはり原擬通り絞罪とするべきだと上奏してきた。三法司は、自らかつて恤刑官の訴え通りに該犯は不加功と判断した事案に、巡按御史は該犯は加功であると述べており、前後の情節が一致しないとして、巡撫に対して関係者を呼び集めて該犯が加功したのか否かを確定させるべきだと上奏し、裁可された。再審理をした理刑官・按察使・巡撫はいずれも該犯は確かに加功であると判断している。

63 谷井陽子「明律運用の統一過程」（『東洋史研究』五八巻二号、一九九九）は、明代において、五年審録などを通じて審判基準の共有が問題として意識され、統一的な審判基準を設定するために変革が進んだことについて明らかにしている。

64 内閣大庫二二—三〇八および一五〇—四四三、順治一三年十一月二〇日、刑部郎中霍炳（江西恤刑官）。

65 『明清檔案』 A二八―一三四、順治一三年九月一〇日、刑部郎中王度（江北恤刑官）。なお、江北恤刑官王度が北京に戻り勅諭を皇帝に返還したのは、順治一三年一月四日である（註39前掲史料内閣大庫八九四五七。この上奏には「該衙門察収」という批紅がしるされている）。

66 内閣大庫八八〇〇二、順治一三年一月四日、刑部員外郎方亨咸（湖広・広西恤刑官）。

67 『明清檔案』 A二七―一二、順治一三年五月八日、刑部郎中劉允燦（山東恤刑官）。

68 内閣大庫八七五二七、順治一三年閏五月六日、刑部尚書図海等。

69 内閣大庫八八〇四一、順治一三年八月一日、刑部尚書図海等。江西恤刑官の上奏は次の通り。「但江西、地方遼闊、所隸壹拾參府、而贛南尤遠在天表距省城更有壹千參百里、兼以水路迂廻。每視一府、除行路不計外、其間閱招審因繕疏造冊、非壹月不能竣局。此按臣共事伍郡與臣朝夕靡寧、道府諸臣所目睹者也。今限期已屆而踴蹶難周。伏乞皇上俯察江西道路之遠・府郡之多、更倍於他省、勅部酌議量□寬展俾臣得免完職業、以広皇上浩蕩之仁。合應奏請定奪。」本史料は恤刑官からの上奏に対する覆奏である。

70 註37前掲史料内閣大庫八八〇〇〇において「統於本年伍月初貳日、准按臣鍾有鳴手本、内称奉旨下部在撤回之列、遵奉謝事、將鳳陽會彙移覆到臣、俾候新按。臣閱邸報、差員方在會議、新按履任無期。微臣欽限已迫似難久待。謹具陳情。伏乞勅部議覆、以便遵奉施行。」と上奏している。

71 註65前掲史料『明清檔案』 A二八―一三四、「拾參年伍月拾柒日、具有按臣撤回一疏、奉旨刑部知道、欽此、隨該本部堂題覆、照江南恤臣劉世傑例会同有司連行審奏等因、本年閏伍月參拾日奉旨依議、欽此欽遵、陸月貳拾參日、備劄到臣。」

72 内閣大庫八八〇三一、順治一三年一〇月三日、刑部尚書図海等、「本部広東清吏司郎中周茂源呈前事。内開、職自奉命差往河南審録、業經審過開封・歸德二府、於今年貳月間□□汝寧府患病沈重、先行呈報在案。後經該□□題、蒙本部議覆題差貴州司郎中李盈公接管、遵將審録閱防、在境交代訖。」（史料自体は周茂源から勅諭が返却されたことを報告する上奏文）、同一一九九

八四、刑部尚書図海等（日付不明、貼黄が残存）、「該臣等議得。貴州司郎中李盈公差往河南恤刑染病身故、該督疏請前來。臣等查得。前山東恤刑官劉允燦、臣部題參、奉有未完恤案著該巡按御史審奏之旨、欽遵在案。查山東恤案、恤刑官審完伍府未完止壹府。今河南審完止貳府、尚有陸府未經審完、相應遣官接代審錄。除審完貳府外、其未完陸府秋決人犯、應暫停行刑、候恤刑官審錄可也。」、「明清檔案」A二九一九〇、順治一三年一月一八日、刑部郎中金鎮（河南恤刑官）、「臣本謫劣、謬蒙題差河南審錄、奉有依議之旨。臣念切簡書。於本年拾月貳拾伍日、陛辭就道、於拾壹月拾伍日、入河南彰德府境、隨接分巡河北道臣楊春芳移送印信手本、差彰德府經歷司經歷洪寅齋交前恤臣封貯審錄閱防壹顆、臣恭設香案拝領、望闕叩頭謝恩訖。隨即赴汝寧府審錄。」

- 73 内閣大庫一二〇三〇〇、刑部尚書図海等（日付不明、貼黄のみが残存）「該臣等查得。湖廣司郎中陳丹差往陝西・四川恤刑、今京察已經革職、尚有陝西肆府貳鎮未完、相應遣官接代審錄。除審過陝西肆府外、未審肆府人犯應照河南例暫停秋決、聽恤刑官審錄可也。」、同八九二八七、順治一三年一月九日（揭帖）、「本部題。浙江司郎中趙賓差往陝西恤刑、今吏部咨稱、趙賓以前任錢糧事革職、相應更差等因、呈堂。該臣等查得。浙江司郎中趙賓補差陝西恤刑未到既經革職、相應更差本部貴州司郎中劉緝堯前去、恭候命下、以便移揭内院、并咨吏兵二部、撰給勅書勘合火牌、差遣前去審錄可也、等因、具題、順治十三年十月二十六日、奉旨依議、欽此欽遵。」、「明清檔案」A三〇一六二、順治一四年二月四日、刑部郎中劉緝堯（陝西恤刑官）、「竊惟、我皇上軫恤民命、補差恤刑不以職為疎、庸勅命審錄陝西、敢不恪慎咨度以副任使。職於順治拾參年拾貳月拾捌日恭領勅諭、即束裝就道、於拾肆年正月貳拾玖日由大慶関渡河入境。」

74 註72前掲史料内閣大庫一九九八四。

75 註50前掲史料『明清檔案』A三二一二七。

76 註50前掲史料『明清檔案』A三二一二七。

77 『明清檔案』A二七一—一九、順治一三年五月一二日、刑部尚書図海等。この上奏は直隸における矜疑案件について提出されて

清朝初期における「恤刑」（五年審録）について

いる。

78 以下の議論については内閣大庫八六九五二、順治一三年五月二三日、刑部尚書図海等。

79 三法司の審理を命じた皇帝の諭旨の中でも「さきに恤刑事件を九卿等衙門に命じて會議させるとしたのは、もともと刑獄を慎重にするためであった〔前將恤刑事件令九卿等衙門會議、原以慎重刑獄〕と述べられている（註78前掲史料内閣大庫八六九五二）。

80 順治一〇年から再開した朝審で九卿会審を実施していたことも、理由の一つと考えられる。

81 後年、地方秋審事案もまた九卿詹事科道等官による会審を経ることが定まるが、恤刑手続においてみられたような混乱はなく、清末に至るまで実施されている。おそらく、地方督撫に対して報告書類提出の期限を設け、事案の概要および督撫原案を記した「招冊」があらかじめ作成されて会審の参考資料として関係各衙門に配布され、会審では招冊と刑部原案をもとに議論が進められ、また会審が八月末から九月にかけて比較的短期間で終了するなど、手続の合理化・円滑化があったことがその背景にあるのではないだろうか。

82 『世祖章皇帝実録』卷一四二、順治一七年一月丁巳条（二月六日）。

83 『世祖章皇帝実録』卷一四二、順治一七年一月壬子条（二月一日）。

84 『聖祖仁皇帝実録』卷三〇、康熙八年六月癸酉条（六月二日）。

85 明朝における熱審に関しては、万曆『大明会典』卷一七七、「熱審」。

86 康熙『大清会典』卷一三〇、「熱審」。

87 烏善高氏は註3前掲論文のなかで唐代の「慮囚」を取りあげ、その機能について、冤罪をなくし滞獄を即決することこそが主眼であり、刑罰の減免という効果は付随的な措置であると述べている。

88 註30参照。また、一部地域では恤刑が終了するまで秋後処決は停止されている（註72および註73参照）。

89 岩井茂樹「明末の集権と『治法』主義——考成法のゆくえ——」（『明清時代の法と社会』編集委員会編『和田博徳教授古稀

記念——明清時代の法と社会』、汲古書院、一九九三）。

90 小野達哉「清初地方官の考課制度とその変化——考成と大計を中心にして——」（『史林』八五卷六号、二〇〇二）。

【付記】 本稿は平成一七年度科学研究費補助金（若手研究（B））による研究成果の一部である。

